





花音ちゃん

お尻遊び



ぎゅるるるるううう

子犬の鳴くような音が、耳をくすぐった。

くりゅうううん

それはじゃれつくような甘えるような、思わずわしやわしやと頭を撫でてあげたくなってしまう、庇護欲を誘う音だった。

「あ……っ……やつ……はあ……んんっ……」

それにあわせて、息も絶え絶えな吐息。

「だ……め……あっ……せんせ……やだあ……」

苦しげで、切なげで、だけどどこか熱を持った声。

「はな……してえっ……んんっ……」

今にも泣き出してしまいそうな大粒の涙を瞳にためて。

「こ……あんっ……いちや……やだあ……」

上目遣いにさがるように視線を向けて来て――

ぐりゅるるるるっ

「あ……っ……だめっ……ほんと……だめっ……」

びくんつと身体を震わせながら、ぎゅうつと目を閉じ眉間に皺を寄せて――

「こらあ、だーめ、花音ちゃん。目を閉じちゃダメ」

「あ……んんっ……だつて……あつ……だつて……」

「先生の目、ちゃんと見ててって言ったでしょ？」

「でもっ……あつ……でもお……」

ぎゅるるるるるるる りゅりゅりゅりゅうん

「もう……あ……っ……でちゃう……んんっ……だしちやうつ……からあ……」

その可愛らしい音は、少女のべったんこのお腹から響いていた。

トイレの個室の便座にすわった彼女は、ふるふると小刻みに震えながら、はあっ、はあつと苦しげな、熱く濡れた吐息を盛らしていた。

「ね……私の目、見て？」

「は……んんっ……んうっ……」

「ふふ、花音ちゃんの目は本当に綺麗ね。素敵。キラキラしてる」

「あつ……んあ……っ……やつ……やあ……やつぱり……んんっ……だめえ……」

少女の柔らかな頬を両手で挟み、くいつと少し上を向けさせる。そうやって顔を逸らす逸らすことが出来ないようにして、顔をめいっぴい近づけ瞳を覗き込む。

ぎゅるるるるるるる

「あ……はあ……ああつ……んあ……っ……せんせ……」

「せんせえ……」

そうされると少女はまるで心臓をぎゅつと握られたような気分になってしまい、目を逸らすことも、目をつむ

ることも出来ずに、ただふるふると震える事しか出来なかった。

「んんっ……あつ……あう……おなか……あつ……いたい……っ……んんくうっ……」

「そんなに量を入れてないんだけど……花音ちゃん、浣腸には慣れてないから仕方ないのかしら」

「あ……も……ゆるしてええ……」

「え？ 何を許すの？ 先生、ダメなんて一言も言っていないんだけどなあ？」

ぎゅるるるるるるる

「んあつ……ああつ！ んんっ……くううっ……んんっ……」

「出しちゃっていいのよ？」

「や……やだあ……っ……やだあ……っ……」

額に汗を、瞳に涙を浮かべながら、羞恥に頬を染める少女。

「先生、花音ちゃんの可愛い所見たいなあ」

「やあつ……んんっ……だつ……めえっ……みちやだめっ……あつ……！ みちやつ……だめえ……っ……！ あっ……ああつ……あああ……っ……」

だけど、まっすぐに自分を見つめてくる『先生』の瞳に彼女の心は少しずつ少ずつ障壁を取り去られていく――

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしてても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃおう？」

それは心を蕩けさせ、身体の内自由すらも奪い取ってい

く魔女の囁きのような、甘美な邪惡とでも言うべきものだった。

§

さて、時間は少し遡る。

それはとある平和な一日、穏やかな天気の下下がりのこと……。

「もうちょっと、もうちょっとだけ待ってね。ほんともうちょっと、もうちょっとで終わるから……」

保健室の主人——能見絵理衣——は、目をぐるぐるとさせながら、凄まじい勢いでノートパソコンのキーを叩いていた。

その机には書類が幾重にも重なり、まるで山の様。不安定に積み上げられたその様子は、今にも倒壊してしまいそうな塔に似ているかもしれない。

「ああ、あと一〇分、あ、えと、二〇分？ さ、三〇分くらいで……多分、きつと、おそらく、はわ、はわわわ……」

そんな積み上がったタスクを前に、希望的観測を述べる絵理衣だったけど、その様子を見つめている少女

——倉橋花音——は、このお仕事タワを片付ける

のは、あと一時間か二時間はかかるだろうと、冷静に判断していた。

「仕方ないですよ、お仕事だもん。だから先生慌てないで。わたし、待ってますから」

今日は学校が終わったら遊びに行こうと約束をしてい

ただのだけど、それがふいになりそうだからといって不機嫌になっちゃおうような花音ではない。

「何かお手伝いします？ あ、でも、かえって邪魔かな……飲物とか買ってくる？ 甘いものとか、ポテチとか、他に欲しいものあったら……」

少し心配げな表情を浮かべつつ問いかけるその姿はまさしく天使。

「ああーんごめんね花音ちゃん！ ありがとー！ やさしいーっ！ 先生がんばるううっ！」

そのエンジェルっぷりに励まされ、一瞬絵理衣のやる気ゲージはマックスまで跳ね上がる!!

だったの、だけ……。

「ああーん、やっぱむーりいー、おわんなーいようっ！ 花音ちゃんとデートできないよお！ うああああん」

「ああ、泣かないでよせんせー」

次の瞬間にまた、泣き言を盛らしながら両手を『お手上げ!』とばかりにばんざいして、ジタバタジタバタ暴れる情けない大人ムーブ。

「ほら、がんばろ、せんせ。コツコツやったら必ず終わるから。せんせーがお仕事終わるまでわたしもついてるから。ね？」

「うう、かのんちゃんああんっ!」

それに対して見た目の幼さからはとても予想の付かない包容力を発揮する花音は、抱きついてくる絵理衣の頭を胸に抱きしめて、よしよしなんて優しく撫でたりしてあげるのだった。

「ね、せんせ。ちょっと休憩しよ？ クラスの子にチョコ貰ったんだ。すっごく美味しかったから、せんせーも食べたらきつと元気が出るよ」

少し落ちついた様子を見て、絵理衣に背を向けて、保健室のベッドの脇に置いていた通学鞆を取りに行く花音。

「ねえ、花音ちゃん？」

「んー、なあに？」

「ちょっとだけお願い聞いて貰ってもいいかしら？」

「ふえ？」

ふとそんなことを聞いてくる絵理衣の言葉を不思議に思い、振り向こうとしたその瞬間——

「ぎゃっ!」

花音は勢いよく、むぎゅつとベッドに押し付けられていた。その可愛いお尻を突き出したような姿勢で。

「も、もう、なに？ せんせ……っ！ ほ、ほんとになになにつっ!」

その姿勢のまま花音のスカートを大きく捲り上げ、可愛らしい下着を勢いよくズルリと下ろす。

「ちよっ! ちよつと待って! せんせ! わきやつ! なになに? なにするのっつ!」

「気分転換」

「ほえっ!」

「花音ちゃんの可愛いお尻を撫で撫でしたら気分天下でリフレッシュできて元気になると思うの」

「えっ? えええっ?」

「花音ちゃんは先生のお願ひ聞いてくれない?」

「そ、そんなことは……ないけど……」

花音の返事も待たずに、撫で撫で撫でと剥き出しになった可愛いお尻を撫で回す。

「んっ……くすぐった……いよ……」

「うふ、花音ちゃんのワレメちゃんかわいー。いっぱいキスしてあげたくなっちゃう」

「せ、せんせ！ お仕事あるんだよね！ 終わらせないとけないんだよね!! そ、その、終わったら、その、シテ、いい……から……んくっ……」

「ううっとなレメを優しく撫でていく指先にぞくんと震えてしまう。

「やーだ。先生今がいい」

「そんな……あっ……ワガママ言わないで……あんっ！ 何度かしゅっ、しゅっとなレメをなぞったあと、くばあつと押し広げる。

「ああ……素敵……花音ちゃんのおまんこの入口かわい……ピンク色で綺麗で、ひくひくしてえちちで……」

「んっ！ んあっ……！ やっ……！ ゆび……っ！ 入れちゃだめっ……!」

「でもね、今日はこっちじゃなくて、こっちにしようと思っの」

「ふやんっ!」

そしてふうつと熱い吐息を膣口に吹き込んだ後、絵理衣はそれまで弄っていた穴とは違う場所に、そつと指を触れさせた。

「せ、せんせ……そこは……」

「そこはなあに？」

「お、おしりのあな……」

「そう、お尻の穴。女の子はね、ここでも気持ちよくなれちゃうのよ」

「うう……うそだあ……」

「嘘じゃないわ、ほんとほんと。お友達に聞いてみたらいいのよ」

「そんなの聞けないよお……」

くすぐすと笑いながら、きゅっとな閉じた穴の外周を撫で撫でとする。

「んっ……くっ……やだ……そこ……きたな……」

「花音ちゃんに汚いところなんてあるわけないでしょ？」

「ひっ……! んっ……やっ……やあ……っ! だ、めっ……あっ! だめっ……! だめえっ……そこっ……すりすりしたら……」

優しく、優しく今まで人に触れられたことのない場所をマッサージされ、声が震える。腰が、びくんっ、びくんっとな跳ね上がってしまう。

「気持ち良い？」

「き……きもちよくなんか……あんっ……! な……い……よお……っ……」

「そお? それじゃあこんな風にグリグリっしてしてみたらどうかしら？」

「あっ! やっ! やだっ! やだあ……っ!」

ぐつと押し込むように親指を押し当て、ぐりっ、ぐりっとな抉るように動かすと、花音は羞恥と、そして何とも言えないゾクツと来るような感覚を覚えてしまっ

「ふふ、まだ、ちよつと花音ちゃんには早かったかな？」

「はっ……! 早いとか……あっ……! わかんないですけど……んっ! や……めてっ……! あっ……ひや……っ!」

「そういうながらもグリグリと尻穴を撫でる。親指の頭を少しだけ押し入れるようにして、ぎゅっ、ぎゅっとな押す。すると、少女のきゅっとな締まった可愛らしい尻穴は、健気にもさらに強くぎゅっとな縮こまり、絵理衣の指を押し返そうとしているかのように蠢いて――」

「それじゃあ、ちよつと下ごしらえしましょうか」

手に持ったもの――ひしゃげて細長くなっしまっしたピンポン球に三センチくらいのくちばしが生えた様な――その細い管状の部分を、するつと花音のお尻の穴に突き入れた。

「あ……っ! つめた……っ! 何か……ひやっ……! 入って……!」

刹那、お尻に感じるひんやりとした感覚。お尻の中に何か液状のものが注ぎ混まれたのだということを理解する。

「浣腸しちゃった」

「ふえ？」

「浣腸、わからない? ほら、便秘の時とか……」

「か……かんちよう……? つ! っつ! な、なんでもそんなことするんですかあ!」

顔を真っ赤にしつつベッドから跳ね起きようとしたその身体を押さえつけつつ、絵理衣はカーゼと親指で、花音のお尻の穴をぐつと押さえつけた。

「下ごしらえっていったでしょ？」

「あ……っ……んっ！ や……っつ！ ぐりぐりし
ちゃ……っ……だめっ……！」

そのまま、ぐりぐりと強く撫でる。

「んきゅっ……！ あ……やあ……っ！」

ぐりぐりと続けて続けると、ひくん、ひくんと小さ
なお尻の穴が蠢く。

「あっ……やっ……だめっ……ぐりぐりだめっ……あ
……っ……！」

ぱくっ、ぱくっとお尻の穴を小さく蠢く尻穴
をマッサージしつつ、可愛い小尻を撫で撫で撫で
る。

「んっ……」

その時——

きゅるっ きゅるるるるっ

花音のお腹が、可愛い子犬か、はたまた恐竜の赤
ちゃんのような、可愛い唸り声を漏らした。

「ふふ……効いてきたみたいね」

「あ……っ……やっ……だめっ……これだめっ……」

さらにぎゅっとお尻の穴を押すと、ぴくん、ぴくんっ
と太ももの筋肉が痙攣する。

「はっ……や……おなか……あっ……おなか……っ……」

少し中に潜り込んでいるガーゼと絵理衣の指を、きゅ
うっ、きゅうっと締め付ける。

「ふふ、ちよつと我慢してね」

「が、我慢って……どのくらい……？」

「二〇分……ううん、二〇分くらいかしら」

「や……やだ……そ、そんな……んっ……我慢……出来
ない……っ！」

「大丈夫。花音ちゃんは強い子だもん。我慢出来るわ」

「あ……んっ……んくっ……そんな……あっ……」

ぐりゅるっ ぐりゅるるるるるるる

「だ……めっ……んっ……お尻の穴……あっ……ぐりぐ
りしちゃ……だめっ……」

「あら？ 我慢出来るようにしてあげてるのに？」

ぐりゅるっ ぐりゅるるるるるるる

「ち……っ……ちが……っ……あっ！ そんな……した
ら……っつ！ ひうんっつ！」

ぐりつと一センチほど親指の先をねじ入れつつくりく
りと廻してやると、少女のお尻の穴はぎゅっ、きゅっ
と強くその指先を締め付け、それと同時に絵理衣には少女
の少し高めの体温が、にゅるっとした感触が、ひくひく
つとした蠕動と共にはつきりと伝わってくる。

「あ……んっ……やっ……やあ……」

それからどのくらいの時間が過ぎただろう。

ぐりゅるるるるるるる ぎゅるるっ ぐりゅるるるるるる

可愛く鳴き続ける花音のお腹。

「んあ……あっ……だめっ……も……だめっ……」

ベッドに顔を埋めながら、はあはあと荒く零れる少女
の吐息。

少女のお尻の穴の内側……直腸は激しく蠢き絵理衣の
指先に絡みつこうと、それと同時に可愛いワレメ
からはごく僅かではあるものの、熱く湯気をたてる粘り
気のあるオツユが溢れて——

「だめっ……んっ……せんせ……あっ……だめっ……も
……ほんと……」

額に浮かんだ汗で、前髪がおでこに貼り付いている。
口もからは涎が垂れ、ベッドのシーツを濡らしてい
る。

あらわになった可愛いお尻はひくん、ひくんと震
えていて、それに併せてお尻の穴がきゅっ、きゅっ
と収縮し、ぶるぶるっ、ふるふるっとならぶ、痙攣して——

「お、おトイレ……行かせて……」

懇願するような少女の声。今にも泣き出しそう……と
いうかもう泣いてしまっているような色で、彼女は声を
絞り出している。

「くすっ……」

その様子に絵理衣は笑顔をうかべ、しばらく
の間、何も言わずに少女が震える様子を見つめていた。

「せん……せん……」

精一杯首を巡らせ自分の顔を見上げ、綺麗な瞳にうる
うと涙を浮かべて見上げてくる花音の様子にもう一度
微笑んで。

「うん、いいよ。先生が連れて行ってあげる」

そうして、花音の身体をお姫様抱っこで抱え上げ、ゆつくりと足を進めた。

S

——そして。

「ほら、花音ちゃん。スカート汚れちゃったら大変だから、両手で、こうやって持ち上げて」

ふるふると震えながら、言われるがままにスカートを捲り上げる花音。

「はい、セーラー服まくり上げて、先生に可愛いおっぱいを見せて」

更にセーラーの裾をまくり上げてふるふるとわななく口もとに持つて行くと、条件反射のようにはむつと啜えてしまう。

「ほら、いいわよ。出しちゃって」

「んっ……むっ……んむうっ……あめっ……あめっ……みあいえ……っ……」

改めて瞳を覗き込んでやると、羞恥と混乱に正常な判断能力をすっかり失ってしまった花音は、顔をびつくりするくらい赤くして、目の焦点をまぐるしくあちこちに移しながら絵理衣を見つめ返してくる。

「んふ……乳首立ってる」

「んも……こえ……っ……こえあ……」

「大丈夫、わかってる。先生ちゃんと分かっている。さっきの浣腸にはちよつとだけ気持ち良くなるお薬が入って

たの。だから、恥ずかしくて感じちゃってるとか、そういうのじゃないから。安心して、花音ちゃん」

つんつと尖った乳首をびんつと指先で弾くと、便座の上で少女の身体が跳ねた。

「あ……あああ……あ、あ、あ、んくっ……あ……」

スカートを捲り上げた手をギュッと握りしめ、セーラーの裾を加えた口もとを噛みしめて、ぞくっ、ぞくっ、ぞくっ……と何度何度身体を激しく震わせて——

「だから、出しちゃっていいわよ。もう、いっぱいっばい我慢したんだもの。花音ちゃんは偉いわ。だから……」

「~~~~~」

きゅつと乳首を摘まんでやると、声にならない声を漏らして、花音の身体がびくんと跳ねた。

「んっ……んあ……あ……あ……あ……あ……あ……」

薄いお腹がひくひくんと蠢き、つま先立ちのようになりながら、足にぎゅうううつと力が入った。

そして。

びゅっ　びゅるっ　びゅるるっ

ぶびゅっ　ぶびゅるうううっ

可愛らしい鳴き声。

排泄の音だなんて信じられないくらいに甘美な音。

「見ないで……あつ……せんせ……っ……みない……でえええっ……」

啜えるのをやめても、ペロんとめくり上がったままの

セーラー。

可愛らしい膨らみと、可愛らしいぽつちをふるつ、ふるつと震わせながら花音は消え入りそうな声を漏らしたのだった。

それまで堪えていた全てを解放し、全てを絵理衣に晒したのだった。



「ふふ、意地悪じゃないわ。先生は花音ちゃんに新しい

お腹のなか……っ！ あ……っつ！ 燃えちや……う

「つて……！ にゆるんつて入ってきて……つつつ！」

まだ半分ほどしか入っていない薬液だったが、それはもう、花音の直腸をすっかり満たしていた。新たな薬液を送り込もうにも満タン状態のお腹は、新たな侵入を拒んでいるかのようだった。

だけど、足を上げ続けていれば薬剤は容赦なく注ぎこまれる。

イルリガートルから伸びるカテーテルはアナルプラグに繋がって、少女のお尻の穴からの逆流を完全に防いでいるからだ。

そんな中、ゼリー化した薬剤は、その重みで更に奥、花音の直腸の中にある小さな窄まり、結腸をゆつくりと、しかし強く押し拡げ、にゆるんつ、にゆるんつと入り込んで――

「あつ！ うあつ！ んあああつ！ だめつ……！
だめだめつ！ お腹……つ！ お腹……つ！ 奥……つ！ 拡がるうう……つ！」

一度入り込むと後は早かった。

結腸を強引にねじ開けたゼリー状の薬剤は、重力に導かれどんどんと花音のお腹の中を満たしていった。

「うあ……！ あつ……！ やつ……！ おく……つ！
入って……つ！ あ……つ！

たぶんつと音がするほどに膨れあがった少女のお腹。それでもなお奥へ奥へと流し込まれ、更に大きく花音のお腹を脹らませていく。

~~~~~

またしても、少女のお腹が可愛らしい鳴き声を上げた。

くきゅるるるる

ふうつ、はあつと苦しげな花音の吐息にあわせる様に、その鳴き声は響き続ける。

「はあ……つ……はあ……つ……熱い……んつ……重い……あつ……くる……し……つ……も、はいら……ない……あつ……！ も……はいら……い……つ！ のに……いいつ！」

さすがにもう無理だと泣き言を漏らしたとその瞬間、ずるるつと勢いよくゼリーが結腸を超えていった。

「あつ！ んつ！ きゅううんつ！」

ぎゅつとお腹の奥に力を入れて侵入を拒んでいるのに、それでもなお、お腹の奥の奥に潜り込んでくる圧力を拒めなかった。

「む……りつ……あう……むりい……むりい……つ……」

ふるふると首を横に振る。

ぽろぽろと涙を零しながら苦しげに吐息を盛らす。

「んふ、もう少しよ花音ちゃん。もう少し、ほら、頑張つて。ゴーゴーレッツゴー花音ちゃん」

そんな少女の様子を見つめながら、場違いに軽い声を上げる絵理衣。

その頬は赤く上気し、漏れる吐息は僅かに荒く、熱く。爛々と輝く妖しい瞳は少女の悶える様をじつと、一秒たりとも見逃さないとばかりに見つめ、射貫き、ねつとりと纏わりついていった。

きゅるるるる

「はいつ……たつ……あう……つ……入り……つ……ましたあ……つ……」

やがて、花音は薬剤の全てを尻穴で呑み込みきって、ぶるぶるつと震える。

「も……だめつ……おなか……つ……ばくはつ……しちやう……あつ……ああつ……」

ぎゅうつと目を閉じ口唇を噛みしめて、みちみちに脹らんだお腹をたぶん、ぶるんつと揺らした。

「だ……あつ……ださ……つ……せて……あう……出させて……んつ……く……ださ……あつ……ああつ……！

はち切れそうなほどの苦しさは、羞恥より上回る。

何度も浣腸されてその様子を全部見られていたからということもあつただろう。だけど、それを抜きにしても、重さと、熱さと、内側からの圧力は、彼女にそんな言葉を口走らせていた。

「ふふ、慌てない慌てない」

汗に濡れた肢体。口もとから零れる涎。びくん、びくんと小刻みに身体を震わせる花音の足から、わざとゆつくりと、もたもたと手際悪く、たつぷりじらす様にながら、イルリガートルを外して行く絵理衣

「はい。出しているわよ」

「あつ……うつ……うあ……つ……！

イルリガートルを取り外されると、少女は高く掲げていた腰を落とし、ぞくん、ぞくんと震えた。



「どうしたの？ 花音ちゃん？」

「あ…でなっ…あつ！ でない…っつ！ んくっつ！ でないよお…っつ！」

ぐつと息んでみたものの、中で硬くなった薬剤は、少女のお尻の穴から出て来ようとはしない。

「あら、それは大変」

それは、何ともわざとらしい言葉だった。

「どうしましょうっか」

そして、あまりにも白々しい声だった。

「せん…せえっ…あうっ…くる…しっ…んっ…くる…しい…よお…」

「落ちついて、花音ちゃん」

くすくすと笑いながら、絵理衣衣は花音に語りかける。

「ほら、息整えて。深呼吸して」

「はあ…ふあっ…はあ…あつ…あう…んっ…くる…しっ…」

言われるがままに息を整えようとしたが、それが出来ない。はち切れそうなお腹の痛みと熱、そしてなんだかよく分からないゾクゾクとする感覚に、少女ははふっ、はふつと激しく荒い吐息を盛らすばかり。

「んっ…んんっ…っ！ んうううっ…！ んんんっつ！」

足を大きくV字に開き、手を伸ばしてぎゅつと足の裏を掴む。

ふうっ、ふうつと大きくいきみ、全身をびくんびくんと震わせる。

「あはっ、花音ちゃんのお尻の穴っ、きゅうっ、きゅう

っしててる。可愛い」

「あう…んあああ…んふあああ…っつ！」

くぱっ、くぱつと穴を上げつつ、むりむりむりつと盛り上がるまで、なんとか中に詰め込まれたものをひり出そうとして――

「んふ…花音ちゃんのお尻、裏返っちゃいそう」

開いて閉じてを繰り返す可憐な穴の中に、青くて透明なゼリーがみっちり詰まっているのがはっきりと見えた。

それは少女の小さな肛門から排出するにはあまりに太く、そして硬くなってしまうていた。

「もう一回、ほら、花音ちゃん、もう一回、深呼吸して？」

すう…はあ…すう…はあ…

「あ…う…んっ…はっ…ふあ…んんっ…あうっ…あううっ…あ…すうっ…はあ…っ…すう…」

必死で息を整え、深く呼吸する花音。

「そうそう、もう一回。すうっ…はあっ…」

「すうっ…はあっ…すうっ…はあ…っ…」

お腹をきゅるきゅると鳴らしながら、口もとをわななかせつつ、深呼吸を繰り返す。

そして、花音が何度目かの吐息を漏らしたその瞬間

絵理衣はぐつと、力いっぱい少女のお腹を押し込んだ。

「つつつつつつ！」 その瞬間。

少女の尻穴は大きく開き、裏返るように盛り上がる。そして、詰め込まれたゼリーが、勢いよく、飛び出した。

「あつ！ んあああああつ！」

ずるずるずる

その勢いに、意識が吹っ飛んでしまいそうなほどの衝撃が花音を襲う。

今まで我慢に我慢を重ねた結果の開放感に、凄まじいまでの快楽が小さな頭の中で荒れ狂う。

「あつ、あつ、あつ、あ、あ、あ、あ、あ、あつ！」

魂と一緒に抜けてしまいそうなほどのその感覚は、今までには味わったことのない未知のもの。

「ひっ！ うっ！ う、う、う、う、う、うっつ！」

その濁流のような官能に、花音は裏返った嬌声を上げ、何度も何度も身体を跳ねるように震わせて――

「あ…う…っ…？」

だが、そんな彼女の開放感が唐突に消える。お腹の中にはまだ沢山のゼリーが詰まっているというのに、お尻の穴を押し上げたまま、ゼリーの排泄がぴたりと止まってしまう。

「で…っ…なっ…あうっ…でない…んっ…でないいいっ…」

それはお腹の中の奥の奥、S状結腸と呼ばれる場所にゼリーが引つかかってしまっているからだっただが、少女にはそんなことはわかるはずもなかった。

「んっ…んんっ…んうっ！ んうううっつ！」

花音はS状結腸部でゼリーをぎゅつと締め付けながら、もこつもこつと肛門を脹らませひくつかせて排泄を



続けようとしたが、どうしてもそれを達成することは出来なかった。

「あ……うつ……あう……せん……せえ……つ……」

半ば意識を飛ばした状態で、ぱくぱくつと震える口もと。

「せん……せえ……あつ……んつ……たす……け……て……つ……」

そもそも彼女にこの責め苦を与えているのは絵理衣だというのに、健気にも頼り縋ってくる子犬の様な瞳。

「ふふ……出せない？ 花音ちゃん？」

「あ……うつ……でな……つ……あうつ……でない……のつ……あつ……」

背筋がゾクゾクとする。

胸が熱くなり、全身に広がっていく。

可愛い。可愛くてたまらない。こんなに可愛い娘を鳴かせ、悶えさせ、震えさせるといのは何と背德的なんだろう——

「うん、それじゃあ、先生が助けて上げる」

「んっ……あつ……あう……つ……たすけて……あう……」

「……せんせ……たす……け……」

「ええ、助けて上げる！」

「てっ！ んひああああああああつっ！」

その瞬間、絵理衣はぎゅつと強く、強く強く、花音のお腹を押し込んだ。

「……」

その強い圧力に少女のS状結腸の奥にあったゼリーが、勢いよく排泄された。

「あつ！ あつ！ ああつっ！ んあああああつっ！」

ずろろろろつ！ と肛門を盛り上がらせて勢いよく排泄されるゼリー。

「ふあ……あ……つ……ん……あつ……ああ……つ……」

一瞬の安堵感にきゅつと閉じて、後から後から溢れ出ていたゼリーが千切れる。

「んっ……あつ……ああ……あああ……つ……」

それからもう一度、ずろろろろつと勢いよくゼリーは排泄されて。

「あつ……ああ……あつ……」

花音の可愛い鼻から、つううつと鼻血が垂れていった。

「はひ……ひっ……ひうっ……」

小さな胸を激しく上下させながら、口許がわななき、熱い吐息が漏れた。

「んっ……ひっ……あつ……まだ……まだでるっ……でちやううう……っ……」

それでもなお、排泄され続けるゼリー。未だぽつこりと脹らんだままのお腹は、きゅるるつ、ぐるるるつと可愛らしく唸り、押し上げられた肛門はもりつ、もりつと脹らみながら、可愛らしく、そしてエロティックに震える。

「あ……あう……あ……あ……」

「んふっ、どうだった？ 花音ちゃん？」

「は……あつ……ああ……あう……」

「花音ちゃん？ おーい、花音ちゃん」

絵理衣が問いかけても、少女は返事を返しはしなかった。

た。

「あう……んっ……は……ひ……おし……りっ……あう……おし……りっ……ずつと……あつ……ずつと……んあ……つ……きもち……い……の……つづいて……」

初めて味わうあまりに強烈な刺激——バチバチと頭の中で電気が弾けるような未知の快、感に彼女の意識は完全に吹き飛んでしまっていた。

「あら……やり過ぎちゃった……？」

それを見て、一瞬眉をひそめる絵理衣。

「ふふ……」

だけど、改めて彼女はくすつと口もとを歪めて。

「それじゃあ、もつと、もつといっぱい色々教えてあげよつか」

にんまりと、悪い悪い大人の笑みを浮かべた。



「かーのんちゃん」

「ふえっ!？」

はっと目を覚ますと、花音は自分がベッドにうつ伏せになっていることに気がついた。

手首と足首をまとめて縛られうずくまるような姿勢だが、腰にも縄を回されてベッドに押さえつけられているのでかなりの窮屈さを感じる。

「せん……せ? あ、あれ?」

絵理衣の声に応えようと首をひねり、横を向くが、彼女は背後にいるのだろう。その姿を視界に捉えることはできなかった。

「えっと……? ふぎゅっ!？」

すると突然、背中を反らせるようにしてお尻を持ち上げられる。

その反動で押しつぶされた肺からは、可愛らしくてユーモラスな声が漏れ出てしまう。

「んふふ〜花音ちゃんのお尻の特等席〜♪」

そんな花音の様子をにんまりと見つめつつ、絵理衣は少女のお尻と共に持ち上げた下腹部の下に自分の身体を滑り込ませた。

「さーて、花音ちゃんのお尻の穴の具合はどんな感じかなあ♪」

そして、ほとんど真上を向いてヒクヒクしている淡いトキ色の蕾みを、まるでそうするのが当たり前であるかのようにぐいっ指で捻げる。

「にやつ!?!? せ、せんせ——」

複数回の浣腸に——特に、最後のゼリー浣腸にはお

腹の中をすっかり空っぽにされてしまった——緩んでしまった肛門は、少女の浅い直腸の中が丸見えになるほど簡単に開き、ピンクの粘膜を空気にさらす。

そのぞくつと来るような刺激に音は慌てたように抗議の声をあげようとして——

「んきゅっ!」

しかし、最後まで言葉を発する間もなく、後ろから伸びてきた絵理衣の脚が首の下に入り込み、ぐいっ顎を持ち上げ軽く首を絞めるような形で遮られてしまった。

「あつ……やつ……んあつ……せ……せん……んっ……くるし……」

「あらら、ちよつと角度が急すぎたかしら。こんな感じ?」

「は……ふ……うん……少し楽に……つて、そうじゃなく——んきゅうっ!」

縄と絵理衣の肉体によって身体を押さえ込まれ、すっかり身動きが取れなくなってしまった花音。先生の身体は温かで柔らかかったからそこまでキツというわけではなかったけど、それでもやっぱり自分の身に何が起きているのか分からないのは、少女の不安を掻き立てるには十分だった。

そして、そんな花音を他所に尻穴を玩具の様に何度も何度もくぱくぱつと開け閉めして、絵理衣衣は子供の様に純粋な、幸せと感動とわくわくが入り交じったような表情を浮かべてみせた。

「ピンク色の粘膜がひくひくしてて可愛い♪ すぐくえっちゅ♪ ふふ……腸液もいっぱい溢れてお尻の穴から零れてる。どう? 花音ちゃん? こんなにえっちなお

尻の中を先生に見られちゃってどんな気持ち?」

「ち……がっ……あう……っ……ちが……わたしのお尻……んくっ、えっちなじゃない……もん」

「そんなことないわよ、自信持て! ひくひくお口を開けたり閉じたりしてる花音ちゃんのお尻の穴、ほんとうにえっち。可愛い花音ちゃんにびつたりのお尻の穴だわ」

「ちがう……もっん……はう……っ……ちがう……もんっ……」

自分ですらしつかりと見たことがない場所をじっくりと観察され、少女の羞恥心は極限にまで高められていく。必死で否定しようと思っても実際自分のお尻の穴がどんなことになっているのかわからなくて、ただ、いつもなら感じるはずのない場所に空気の流れを感じてしまつて、ぞくん、ぞくんとお尻が踊ってしまった。

「くすっ……そんな控えめな花音ちゃんには、自分のお尻の穴がどれだけえっちなのか、ちゃんとして教えてあげないといけないわね」

そんな少女の羞恥と、微かな官能の様子にほくそ笑みつつ、絵理衣は殆ど動かせず前を見ることしか出来ない花音の眼前に、自分のスマホを立てた。

「はい、こんにちわ、花音ちゃん」

次の瞬間そのスマホの画面に映つたのは絵理衣の顔。いつも綺麗で、ときおり子供みたいに笑って、そして更にときおり、今みたいな口唇を吊り上げた悪い笑みを絵壁ている。

悪戯っぽくて何か悪いことを考えている様子の声は前



と後ろの両方から聞こえて来て、一瞬花音は混乱し、抵抗することを忘れてしまった。

「これはね、小型のカメラなの。今、先生はそれを手に持って、自分の顔を映しているって訳」

種明かしをされると納得で、『そうなんだ……』なんて安堵の吐息を盛らしてしまう。

「だけど――」

「覚えてるでしょう？ 前に花音ちゃんの赤ちゃんのお部屋の入口を観察したわよね？」

「っ！ っ！ っ！ っ！ っ！ っ！」

ふいにそんな恥ずかしい記憶を掘り返されて、花音は顔だけでなく、全身がかあつと熱くなってしまうのを感じた。

そう、それは何ヶ月か前、先生とこの保健室で『遊んだ』日のこと。

大きく足を開く形で椅子に縛り付けられた花音は、おまんこを限界まで押し広げられて、小さなカメラを押し込まれて――

『んふっ、花音ちゃんのおまんこの中、すっごく綺麗ね』

『やあ……やあだあ……見ないで……んっ……見ないでください……あ……』

『あは、ひくひくしてる。気持ち良いのかしら？』

『き、きもちよくなんてないもんっ！』

『でも、奥から沢山えつちなオツユが溢れてきてるわよ？』

『そ……それは……んっ……そんなの……わかんないも

ん……っ……わたし……そんなこと……』

『そっか、それじゃあ沢山勉強しようね♪』

「あ……ああ……」

脳裏に蘇る恥ずかしい記憶。恥ずかしいのに全身がじーんつと痺れて、頭の中が真っ白になって、お腹の奥がきゆうんつとしまうような感覚。

「は……っ……ふっ……はふっ……はふふっ……ふあ……っ……あ……っ……」

吐息が乱れる。

顔が熱くなる。

心臓がドキドキとして鼓動を早くなる。

そして、それと同時に――

「うふ。おまんこのワレメ、綻びてきちゃった。エッチなオツユが溢れ出してる。何されるか期待して、気持ちよくなっちゃった？」

「ちっ……！ ちが……っ――」

「それじゃあそれじゃあご期待通り、見せてあげるね。花音ちゃんのくぼつ、くぼつて苦しそうにしてるえつちなアナル♪」

否定しようとして、急に言葉が萎んだ。

大きな声を出そうと息を吸って、そこで止まってしまった。

「は……っ……は、は、は、は、は、は……」

過呼吸気味の早すぎる息づかい。息を吐くことが出来ず吸い続けてしまう状態。

「ほら……みて……えっちです……くかわいい……」

その瞬間スマホの画面に映ったのは、ひくつ、ひくつと痙攣を起こしたように震えているワレメと、その上でばくばくと呼吸をしているようなアナルの様子。

きゅつと締まったかと思っただくばあつて指が入ってしまいそうなくらいに口を開けて、とろーりと粘っこい糸を引いて、ひくひくつて震える拍子にお尻の穴の中……腸壁が露わになって――

「んふっ、もつと拡げてみようね」

返事を待つこともせず、両手の親指でぐいつと尻穴を押し開いた。

すると、ねつとりとした液体は更に糸を引き、腸壁はひくんひくんと別の生き物の様に蠢く。

内臓だなんてとても思えないくらいに可憐で、それでいて淫靡な様子を、絵理衣は余すところなくカメラに収めて――

「ほら、花音ちゃん。花音ちゃんのお尻の中って、こんなになってるの」

「やあ……」

「見て……ピンク色で綺麗ね。それに、花音ちゃんの呼吸に合わせてひくひくつてして……」

「やだ……あつ……やだ……っ……」

「傷ひとつない綺麗な直腸。やつぱり若さって素敵。ほら、このねつとりしてるオツユ、なんだと思う？」

「ふえっ……ふええ……やあ……っ……見ないで……」

「これはね、腸液。アルカリ性の消化液ね。でも、お尻で気持ち良くなった時も出ちゃうの。おまんこのオツユと同じね。こんなにいっぱい溢れちゃってるって事は、

花音ちゃん、お尻の中を見られて気持ちよくなっちゃってるのかなあ」

「ちが……っつ！ わた……っつ！ きもち……あ……よく……なんか……」

慌てて言い訳しようとするが、最後の方は小さく自信なさげに萎しぼんでしまう。

そうしている間もスマホに映った花音のアナルは、絵理衣の指でくばつ、くばつと開け閉めされ、ぐりぐりぐりつて親指の先で刺激され、とろーりと白みがあった、『本気の』オツユすら溢れさせてしまつて。

「指、入っちゃいそうね」

「ふえっ!？」

流されかかっていた花音はその声に我に返った。

「入れてみちやおつか？」

「だ、だめっ！ だめだめっ！ そんなの……ぜったい……だめっ……!」

ぶんぶんと首を振ろうとするが、しつかりと顎をホルドされていて出来ない。花音に出来るのは、せいぜいお尻をふりふりと振り立てることくらい。

「あは♪ そんなに期待されちゃうと先生嬉しくなっちゃうな♪」

「ち、ちがつ！ ちがいますっつ！ わたっ！ わたしっ……んっ！ くううううんっつ！」

ズブリと人差し指を沈みこまされ、花音は子犬のような声と共に、押さえ込まれた身体をガクガクと揺らした。

「うふふ♪ 花音ちゃんのお尻の中、あつたかあい」

「い……っ！ んっつ！ いうんっつ！ か……きつ

……あつ！ まわすの……っ！ だ……っ……めえええ……」

きゆうつきゆうつと指をくわえこみ、締め付けてくる健気な内壁をぐりぐりと掻き回す。

絵理衣の爪は長く伸ばされていて、このような行為に全く相応しくない。だけど、そんな指でも不思議と花音の柔らかなで敏感な粘膜を傷つけることはなく、むしろ官能を与えていく。

カリッ、カリッと引つ掻くような刺激さえ、少女にはゾクゾクと身体の芯が痺れてしまう、じいんと痺れる快楽として伝わっていた。

「あつ！ んっつ！ あんっつ！ ふあああんっ！ やだっ……っ！ おし……りっ……なか……っつ！ ぐりっ……!」

絵理衣の指をくわえたまま、花音のアナルはひくひくと震えていた。

押し開いてやるまでもなく、くばつ、くばあつと閉じたり開いたりするその場所は、『もつと、もつと』とおねだりしているようにも感じられた。

「指、増やしてみる？」

「……っ！」

ぽそつ耳元で囁くと、少女の身体がびくんつと震える。

「花音ちゃんのお尻の穴、ふにやふにやになってるし……もう一本……二本くらいなら入っちゃうかも？」

「……」

返事はない。返事はないが、熱く、早く、そして蕩けた吐息だけが響く。そして耳元は赤く染まり、絵理衣の

指をくわえこんだ尻穴はきゅつ、きゅうつて収縮して。

「くす……♪」

いつもなら返事をさせるところだが、今日はその気にはならなかった。

「期待に答えてあげないとだめよね」

ただこの少女を蕩けさせ、乱れさせ、とろとろのふにやふにやにしてやりたいと思った。

「ほら……花音ちゃん。もう一本……増やすよ……?」

「んっ……くっ……んんっ……」

足首を握っている手にぎゅつと力がこもる。痕がついてしまうんじゃないかって程に。

「はっ……あつ……あああつ……はっ……はふっ……はふっ……はっ、はっ、はっ……」

息が更に早くなり、浅く苦しげで、だけどどこか甘い、声にならない呻きが漏れる。

「あつ！ ああああつ！」

ずぶんつと二本の指が収まりきると、少女はぞくぞくんと身体を激しく震わせた。

「あは……入っちゃったね二本。きゆうきゅうつて締め付けて来てるね。気持ち良い……?」

「わ……かつ……あつ……わか……なっ……」

「そっか……わかんないか……それじゃあ……もう一本増やしてみましようか?」

「ひ……っつ！」

返事は聞かない。必要ない。

花音に考える時間すら与えず、人差し指と中指をくわえこんでいる狭穴にもう一本、薬指を押し当てて――



「あつっ！」

びくんと少女の身体が震えた。それは一瞬、押さえ込んだ絵理衣の身体を揺らす程の力だった。

「ああつっ！」

ぎしつ、ぎしつとベッドが軋む。

がたつ、がたつと揺れが伝わる。

「あつ……！ あああつっ！ んあつ！ ああああああつっ！」

「ふふ……すごい……花音ちゃん、私の指、三本呑み込んだやつだ」

「は……は、あ、あ、あ、あつ！」

中でぐねぐねと三本の指をめちゃくちゃに動かしてやると少女の腰が卑猥に踊った。まるでお尻を絵理衣に押し付けてもつとつととせがんでいるように、くねつ、くねつ、くねつと蠢いていた。

「上の壁と下の壁、どっちが好き？」

「ひっ！ いっ！ いっ！ いっ！ いっ！ あああんっつ！」

ぐつちゅぐつちゅと音を立てながら、背中側の内壁を、そしてお腹側の内壁をぐりぐりとする。

「あ、こつちかな？ こつちかな？」

「んひっ！ ひっ！ ひっ！ ひっ！ ひきゅうううんっつ！」

どうやらお腹側の方が好きらしいと判断して、こりこりこりこりと強く引っ掻いてやる。

「すごい、花音ちゃんすごい。直腸の中うねうねしてる。先生の指に絡みついてきてる。あはっ♪ えっちなあ

♪ 花音ちゃんのお尻はえっちなあ♪ こんなにえっ

ちなんだつたら、もつともつと鳴かせてあげたくなっちゃう」

「ひっ！ あつっ！ んああつっ！ だつ……めつ

……！ もつ……はい……なつ！ いれ……つっ！ だめっ！ だめ……ええええつっ！」

既に三本の指を受け入れ拡がりきっている花音のAnalに、絵理衣は小指もプラスした。きゅうきゅうと締め付けてくる尻穴は少しの抵抗を見せたけれど、先が入ってしまったら後は早かった。

「すごいね！ すごいね！ 花音ちゃん！ すごいね！ 四本入ってるよ！ 先生の指が四本も入ってる！」

「あ……ああ……うそ……うそ……あ……わた……お

し……あな……」

「ウソじゃないよ、ほら、四本入ってて、こんな風に拡げたら……！」

「んいっ！ んいっ！ ひろ……がっ……ひろげ……

ちや……っ！ だ……めええつ！」

ずっぽりと呑み込まれてしまった四本の指をぐりぐりんと大きく円を描くようにして掻き回してやると、少女の腸粘膜が露わになりとろとろと腸液が溢れた。そして更に、その下の可憐な花園からも、白く濁って泡だつた粘度の高い愛蜜が零れ落ちていった。

「あ……ああ……ああ……」

その様子の一部始終は、全てスマホの画面に映っている。信じられないほどに拡げられた自分のお尻の穴の前に、花音は目を逸らすことも出来ない。

いや、今の彼女はそれに目を奪われていたと言っても

よかっただろう。その証拠に花音は熱く短く浅い吐息を漏らして、頬も首元も耳も全部真っ赤に染めて、見開いた瞳はうるうる潤み、半開きになった口もとからは涎が溢れて――

「すごいね♪」

そんな彼女の耳に、絵理衣は囁いた。

「花音ちゃんのお尻、一生懸命気持ち良くなるうとしてるのね」

ふうううつと熱い吐息を吹きかけながらくすくすと笑った。

「あ……っ……んっ……んあつ……せ……あつ……せん

せ……あつ……わた……わたし……わたし……あつ……ああ……っつ！」

「うんうん♪ 無理に言葉にしようとしなくていいよ。感じて。身体で。心で頭で。ただ、感じて」

「ひ……っ！ んっ！ ひんっつ！ ひいひいんっつ！」

「どう……？ わかる……？ きもちいい……？」

「あつ！ ああつ！ んっ！ あつっ！ きもち……っつ！ い……っつ！ ですうううっつ！」

ゾクゾクゾク。

口にするそれは心に染み入った。『そうだ、自分は気持ちいいんだ』ってハッキリと認識して、それがまた身体の中で暴れ続ける官能にフィードバックされた。

「そう……ふふ……そう。えらいね、花音ちゃんはえらいね。上手に気持ち良くなれてえらいね？ じゃあ、今度は……」

すると再び絵理衣は花音の耳元に口を寄せて、先ほど





「……いつちやえ♪」

四本の指を手刀のように縦にしてぐつと直腸の奥に突き込む。そして、ぐるつと三六〇度回転しながら――

その、刹那。

「~~~~~」

少女は、声にならない吐息の塊のようなものを吐き出して、びくびくびくつと身体を震わせ、ぐうううつと背中を弓なりにして――

ぷつん、と糸が切れたように脱力し、崩れ落ちた。

「は……あ……ああ……あ……あああ……」

ひくん、ひくんと痙攣している身体のあちこち。

四本の指を受け入れていた尻穴は、未だぼつかりと穴を開けた状態で、少女の吐息に併せてきゅつ、きゅつと閉じたり開いたりした。

「上手にイケたね♪」

そんな花音の耳元に、改めて囁きかける絵理衣。

「うふふ……それじゃあもつと、もつと気持ち良いこと  
教えてあげるわね♪」

そして彼女は、爛々らんらんと燃える様な瞳で花音を見つめ

……ぺろりと、長い舌で口もとを舐めた。

「あの……せんせ……?」

「ふふふ、どうしたの?」

花音の不安げな声に、絵理衣はくすくすと楽しげに応えた。

「なに……するんですか……?」

「ふふ……イ・イ・コ・ト」

先ほどまでの拘束は解かれているものの、花音は相変わらず絵理衣の表情を見ることが出来ない。

声を聞けば概ね彼女は上機嫌なのだろうと言うことは想像出来たが、それでもやっぱり相手の顔が見えないのは、少女にとって大きな不安だった。

「えっと……イイコト……ですか……?」

「ええ、すつごくいいこと」

嫌な予感がする。

というか嫌な予感しかしない。

何故なら能見絵理衣という人は、上機嫌の時ほど意地悪なことを考えている女性だからだ。

その彼女が『イイコト』というのはなんだかすごく怖いというか、不安。

だけど、同時に少し、好奇心を覚えてしまう自分がいた。先ほど体験した、頭の中が真っ白になってしまったほどの絶頂——それよりもっとすごいことをさせられてしまうのかと思うと、胸がドキドキとしてしまった。

でも、それでもやっぱり相手の顔が見えないのは不安だ。だっていつもの様な悪い顔なのか、もっともつと悪い顔なのか、それがわからなければ、覚悟を決めることも、準備することも出来ない。

だから花音は絵理衣の顔を見たかったのだけど、今の彼女の状態はそれを不可能にしていた。

花音は今、彼女の体格には少し大きすぎる生徒用の椅子に、背もたれ側を前にして拘束されていた。太もも、手首、そして首。その三カ所を固定してしまうと、彼女はもう、ガタガタと椅子を揺らすことくらいしか出来なかった。

背もたれにかかった縄はぐいっと少女の身体を引き寄せ、結果として花音はお尻を突き出し、可愛らしいワレメと、先ほどあんなに拡張されたのにいつの間にかきゅっと閉じている可憐なお尻の穴を露わにしていた。「花音ちゃんも本当は予想がついてるんじゃないかしら?」

絵理衣の言うとおり、この姿勢を取らされているということは、狙いが『そこ』なのだろうと想像が出来る。

ただ、一体それじゃあ『ここ』に何をするつもりなのか、それはやっぱり想像のつかないことだった。

「はい、問題です。先生は花音ちゃんのお尻に何をしようとしているでしょう!? あ、言っちゃった」

わざとなのか天然なのか、うっかり答えを口走ってしまっ絵理衣。

「なに……するの……?」

その答えは確かに花音が想像していたものだったけど、それ以上のことは何もわからなくて、結局怯えた様な声を上げることしか出来なかった。

「ふふ……そんなに心配しないで」

そんな花音の様子にくすくすと笑う絵理衣。

「答えを言っちゃったし、もうクイズをしたって意味ないものね」

そして絵理衣はゆっくりと花音の前に回り込み……手に持っていたものを『はいっ』って目の前に掲げてみせた。

「ひ……っ!」

そのあまりにあまりな形に息を呑む。

「そ……そんなの入らない……」

太さに顔を青ざめさせる。

それは花音の腕ほどの太さがあるのではないかと思われる、ねつとりと黒光りする『何か』だった。

その表面にはびつしりと棘の様なものが生えていて、そんなものでお尻の穴を抉られたら壊れてしまうと思うた。

「や……やだ……そんなの……や……」

ふるふると首を振る。がたがたと椅子を揺らして無駄な抵抗を試みせる。

「ああ、ごめんなさい。怖がらせちゃったわね。でも、大丈夫。このオモチャ、こんな形してるから太く見えるけど、そんなに太くないから。さっき私の指が四本入ったんだし大丈夫」

「でも……でも……」

「それにこのトゲトゲみたいなのも柔らかいの、痛くないの。ほら」

「んっ……」

『それ』を頬に押し当てられて思わず目を瞑る。

「あ……やわらかい……」





「あはっ♪ 入った♪ 結腸を超えたわね♪ ここを超えちゃえば……どどん入る」

「あつっ！ うあんっ！ いうっつ！ いああんっつ！」

ずるんっ ずるんっ ずるんっ

押し込まれる度、細い場所を通り抜けていく感覚。その通り抜けられる感覚に花音は喘ぎ、身体を震わせ、悲鳴をあげる。

「あ……んっ……あ……だめっ……もっ……だめっ……おなか……あつ……いっばい……んくっ……いっばいだから……」

「うふふ もうちよつとで全部入るから頑張つて」

気がつけば花音のお腹は外からでもはつきりとわかるほどに膨らみ、ふるふると震えていた。異物を排除しようとしているのだろう、きゅるるっ、ぐるるっと唸り、蠢いていた。

「さあ、最後の三つ。いくわよ」

「だ……めっ……んあっ……だめ……なのっ……あつ……もうっ……もうっ……いっばい……あつっ！ んあんっつ！ んうんんんんっつ！」

ずぶっ、ずぶっ、ずぶっ、先端が結腸を超えていく感触が絵理衣に確かに伝わった。その度花音はがたっ、がたがたっと椅子を揺らし、甲高い嬌声があがった。

「はあ……はあ……はあ……くる……し……っ……あう……くるし……せんせ……あ……」

ひうっ、ひうっ、ひうっ、口もとをわななかせ、ぞくぞくと震

える少女。

「も……だめっ……抜いて……あつ……抜いてえ……っ……」

今にも泣き出してしまいそうな、罪悪感を煽る視線が絵理衣を真っ直ぐに見つめる。

「くす♪ 苦しい？ 本当に苦しいだけ？」

「はあ……っ……はふう……っ……お腹……あつ……おなか……んくっ……いっばい……あつ……はち切れちやいそう……だめっ……もう……だめっ……」

だが、苦しげに吐息を漏らしてはいるものの、花音が苦痛だけを感じている訳ではないということも絵理衣には伝わっていた。

その証拠に彼女の可憐なワレメはほんのりとほころび、ところどころと愛蜜を溢れさせていた。

「うん、それじゃあ抜いてあげましょうか」

そんな花音を見つめつつ、優しく微笑む絵理衣。

その優しさは『信じてはいけない』優しさ。

だけど、今の花音にはそれは女神様の囁きのように聞こえて――

聞こえて――

「はや……あつ……はやく……んくっ……抜いて……あつ……抜いて……っ……」

「ふうん……早く？ 本当にいいのかしら」

くすくすつと笑って、花音のお尻の穴から飛び出している輪っかの突いた『それ』の終端に指をかけ、そして――

ずるんうううっ

「ひっ！ あんっつ！」

ひとつ分を引き抜くと、お尻の穴と、そしてお腹の奥――結腸をずるんとを同時に擦られて、頭の中で電気が弾けた。

「あ……えあ……？ い、いまの……ひっ！ ひいんっつ！」

ずるるるるるっ

更にひとつ、今度はふたつ。

「や……あ……な……いま……あう……いま……ごりっ……ごりっ……ごりっ……」

「ふふ……気持ちいいでしょう？ 結腸と肛門、一緒に刺激されるの、すごいでしょう？」

「あ……やつ……な……なにっ……んくっ……なにっ……？」

入れられるときも確かに快感はあつた。にゅるっ、にゅるっ、と太いものが通り抜ける感覚は頭の中でチカチカとしていた。

でも、違う。さつきとはまるで違う。

入れられるときより出されるの方が、一〇倍も、二〇倍も、いや、そんなことを考えられないほどの強烈な刺激。

「コレに生えてる棘みたいなのはね、入れるときは柔かく感じるけど、出すときはざりざりっつて中を抉るの。特に狭い場所を通り抜けるときはぎゅっつて引つかかっつて、そう簡単には出せないぞって、頑張っちゃうの。だ

から……こうやって……」

「や……あ……だ……めっ……やつ……あ……っ……」

ザリザリザリザリッ

「いつ！ ひうううんっっ！」

ぶぽぽぽっ

「ひうんっっ！」

ぢゅぽぽぽぽぽっ

「あっ！ んっ！ きゅうううん……っ！」

勢いよく引つ張り出される度、悲鳴が上がる。

信じられないほどの快楽の奔流に振り回されて、子犬の様な鳴き声を漏らしてしまう。

「あ……は……はう……はううう……」

ぽたぽと溢れ出た愛蜜が、花音の足下に水たまりを作っていた。

それでもなおえつちなオツユは止まることを知らず、ぴちよん、ぴちよんつと音を立てていた。

「も……だめっ……あっ……だめっ……しんぢやう……わたし……あっ……こんなの……しん……ぢやう……」

「入れたままにはしておけないでしょう？ ちゃんと全部抜かないと」

「あ……だっ、だめっ……！ まって……！ ちょっと

……きゅう……けい……んっ……きゅうけい……させ……て……」

「ええ、それじゃあ一気に引き抜いてしましましょう」

「あ……やだ……だめっ……だめっ……そんなの……だめっ……」

聞こえてないわけがないのに聞こえていないふりをし  
て絵理衣はくすくすと笑って、そして、ふうつとひとつ  
息をついて――

にゅるっ にゅるるるっ

ぶぽぽぽぽっ ずるるるるううううっ

ごりっごりごりっごりごりごり

ごりごりごりごりごり

~~~~~♡~~~~~

瞬間、花音の可愛い鼻からふううつと伝ってくる
鼻血。

がたんっ がたがたがたたたたっ

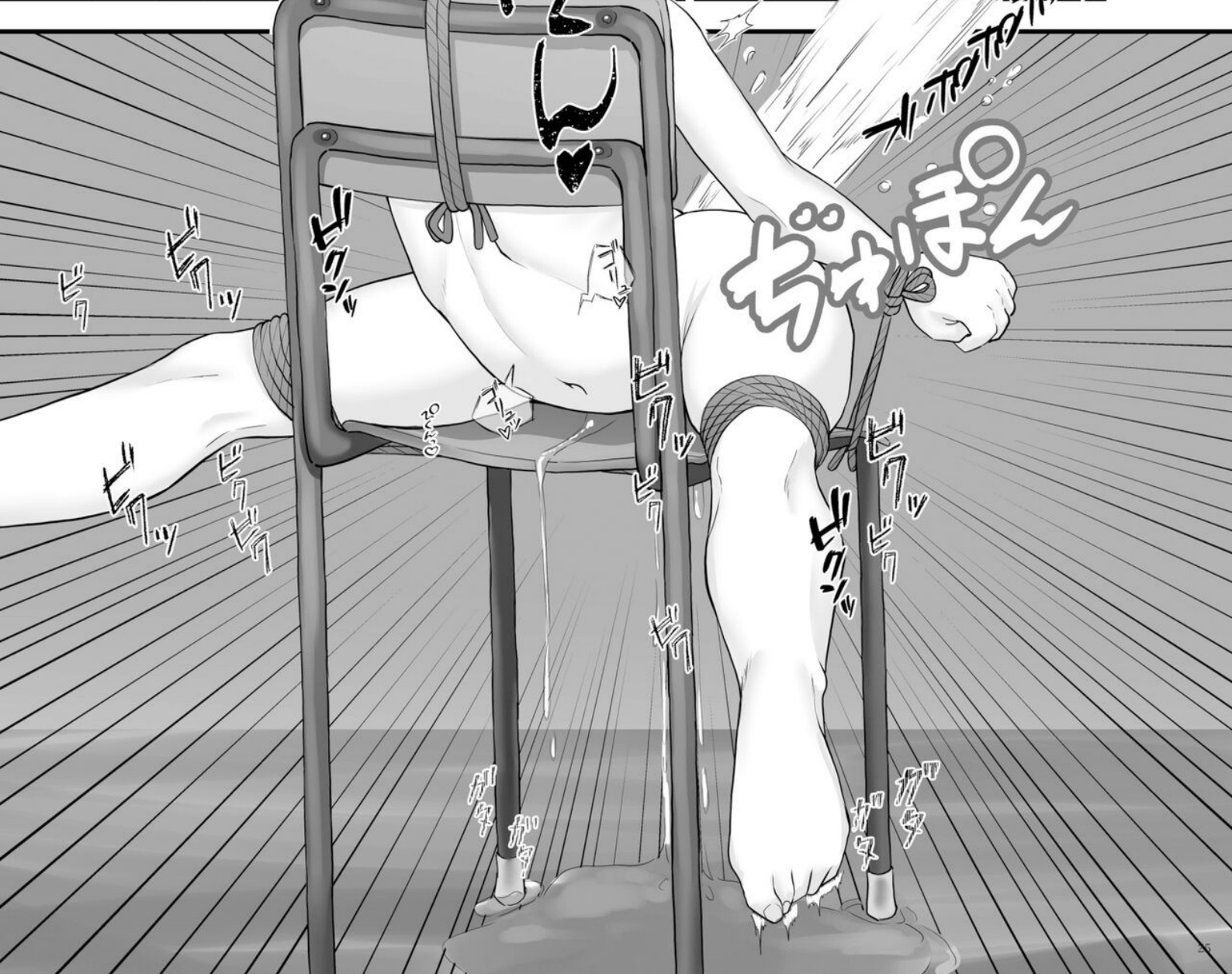
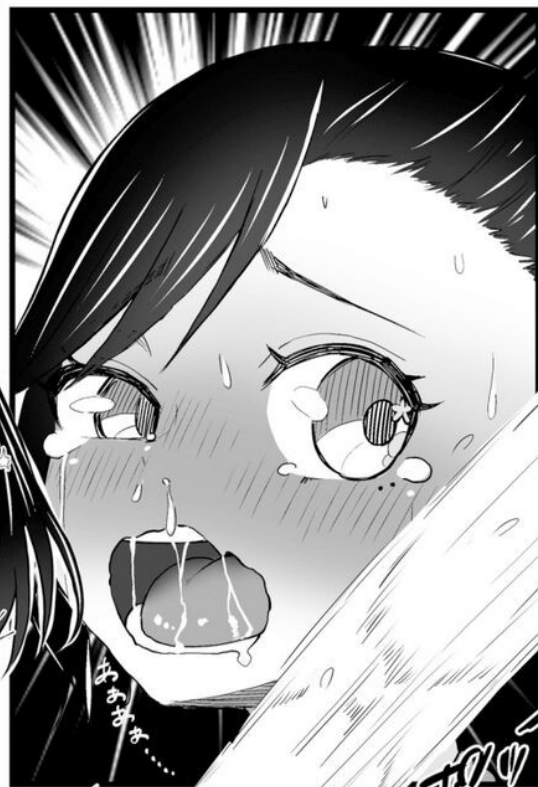
少女は拘束された身体を無茶苦茶に揺れ動かし、逃
がすに逃がせない快楽の奔流に呑み込まれて――

「あ……ああ……ああ……」

鼻血が口もとに垂れていく。ぎゅつと噛みしめていた
口唇の腋からは、泡だつた唾液がこぼれていく。

「ふふ……気持ち良かったね。花音ちゃん♪」

その鼻血を絵理衣指先で拭くと――
ぺろりと、美味しそうに舐めた。



「あの……せんせー？」

「なあに、花音ちゃん♪」

激しい絶頂の余韻がようやく去って、それでも疲れてしまつてベッドで横になつていた花音は、ふと、思い出した様に口にした。

「お仕事、もう大丈夫そうですね？」

「お仕事？　なんだっけ、それ？」

だけど、『あんなハードなことしたのに花音ちゃんは体力があるなあ、これが若さかなあ』なんて考えていた絵理衣は、一〇〇%天然で不思議そうに首を傾げる。

「えつと……」

「ん？」

「せんせー、気分転換してわたしのお尻撫でたら元気になるって……それだけで終わらなかつたけど……」

「あ……！」

そこまで言われて、ようやく気がついた。

「あーっ！　あーあーあー！」

「可愛らしいジト目で睨まれて、『やば』とか思いつつどう誤魔化そうかと思考を巡らせる。

「もしかして……嘘でした……？」

そんな絵理衣を、花音はむうつとくちびるを尖らせてつ、ぶくうっ頬を脹らませつつ見つめてきた。

「せんせー、わたしに嘘つきました？」

ズルい。すごくズルい。こんなしぐさのひとつひとつが可愛すぎて困る。

笑つても怒つても、息も絶え絶えになつても官能に震えてても可愛いだなんて、こんなの完全に反則

じゃないか。

「花音ちゃん！」

「ふえ、は、はいっ！」

「ありがとう！　花音ちゃんのおかげで先生、たつくん気分転換してリフレッシュ出来たわ！」

「う、うん……だつたら……よかつたけど……」

その上押しに弱いのも可愛い。

「でもね、お仕事頑張るためには、もうちよつとだけ花音ちゃんに甘やかして欲しいの！」

「え……えと……えへ……別に……いいですけど……」

しかも、心配になるくらいチョロい。

まあ、押しに弱いのもチョロいのも自分に対してだけだつたら全然構わないというか、むしろウェルカムなんだけど。

「わたし、何すればいいですか？　えつと……お腹痛いのはもう……や……かな……」

「大丈夫。痛くないない」

「ほんとに……？」

「ほんとほんと」

上目遣いに自分を見つめてくる子犬みたいな瞳。

不安そうにしながらも、どこかわくわく、どきどきしているようにも見えるその様子。

「先生ね、花音ちゃんがタマゴ生んでるところ見たいの！」

「……」

時間が止まった。

「えつと……？」

花音はぼかんつて、小さく口を開けて小首を傾げながら絵理衣を見つめた（これがまた可愛い）。

「たま……じこ？」

「そう。タマゴ」

「えつと……わたし、ニワトリさんじゃないよ？」

イマイチ……というか、全く状況を飲み込めていない様子。

「もちろん。花音ちゃんはニワトリさんより可愛いからね」

「えへ……そう……ですか？」

チョロイ。本当にチョロイ。『先生花音ちゃんのこと心配になつちゃうわ、誘拐とかされちゃうわない？』とか思つたりもしたけれど、よくよく考えると多分その犯人は自分なので、心に柵をつくることにした。

「花音ちゃんに産んで貰うのは、じゃーん、これでーす」そして、絵理衣が指に摘まんで花音の眼前に見せつけたのは、ウズラの卵ほどの小さな物体。

「あ……ちっちゃい」

「ええ、ちっちゃいの。それにこんなにやわらかい」

親指と人差し指で挟んできゅつきゅつとしてみると、ふにゅつ、ふにゅつと形を変える。

「えつと……もしかして、それ、わたしのお腹に……」

「ふふ、正解。花音ちゃんのかしいなあ」

お尻に手を回し隠すようにしながら、ベッドの上で後ずさる花音。

「も、もう……お尻は……や……かな……」

「あら、でも、さっきのものより全然ちっちゃくてやわ

らかいわよ？ それに、さっきのだって花音ちゃん、辛
いだけじゃなかったんでしょ？」

「それは……そう……だけど……」

ぽつと頬が染まる。

はふつて、熱い吐息が漏れる。

瞳はうるうるとして、ちっちゃな乳首も少しだけっ
んつて尖つて、きゅつて閉じたワレメの奥がじゅんつて
熱くなつてしまつて。

「興味……ない？」

「……」

「花音ちゃんがいやなら先生やらないけど」

「うー……」

困つたような顔。

あつち、こつち、またあつち、と視線を彷徨わせる。

そして――

「先生が……したいなら……いい……よ」

「くすつ」

につこりと微笑みながら、内心『作戦通り』なんて悪
い顔を浮かべる絵理衣。

『ふふ……このタマゴはね、最初はこんなにちっちゃい
けど……水分を吸うと、何倍にも大きくなるのよね』

誰に言うわけでもないのに、心の中でとても説明つぽ
いセリフを呟いて――

絵理衣は自分の拳よりも大きくなつてしまふタマゴの
ピフォーアフターを頭の中で想像して、改めて、にんま
りと子供の様な笑みを浮かべた。

S

「はい、それじゃあ横になつて。うん、そうそう左手は
枕の下に入れておいた方が安定するかな」

「う、うん……」

誘導尋問のように花音の承諾を得た絵理衣は、少女を
側臥位――つまり、横を向いた姿勢で、ベッドに寝転
ばせた。

「緊張しなくていいわよ。さっきので花音ちゃんのお尻
の穴、十分柔らかくなつてから。だから何にも怖くな
いの」

「う……それ……言わないで下さい……恥ずかしい……」

先ほど自分が見せた痴態を思いだしてしまふのだろ
う、ぽつと頬を染め視線を逸らす。そんな花音の様子を
とても可愛いと思ひながら、『いつまでそんなこと言っ
てられるのかしら』つて、心の中の絵理衣は意地悪な表
情を浮かべていた。

「ひゃん！」

「あは、びつくりしちゃつた？ でも、大丈夫よ」

小さなタマゴをお尻の穴に押し付けると、びくんつと
少女の身体が跳ねる。

「安心して……ほら、力抜いて……息を……すう……はあ
……すう……」

「すう……はあ……」

深呼吸に併せて、花音の小さなお尻の穴がぱくつ、ぱ
くつて開き、閉じる。

さっきあんなに沢山詰め込んで思いつきりひり出させ
たというのに、それでも少女のアナルは可憐で、清楚で、
いたいけで、うつすらトキ色の佇まいのままだった。

「そうそう、その感じ。ほら、続けて。すう……はあ
……すう……」

「はあ……すう……はあ……」

「えいつ！」

「んにうつ！」

そして何度かの深呼吸のあと、少女のお尻の穴が緩ん
だ瞬間を狙つて、ぐつとタマゴを押し込む。

「あ……んっ……んんっ……んんう……」

「ほら、辛くないでしょう？」

「う、うん……」

「それじゃあもつと入れていい？」

「も……もつと……？」

すっかりほぐれた花音のお尻の穴は、考えていたより
もあつさりとタマゴを呑み込んだ。その時覚えた感覚
は彼女にとつて不快なものではなかったらしく、はあ、
はあ、と深く静かな吐息を漏らしつつも、うつとりとし
た表情を浮かべていた。

「もつとつて……どれくらい……？」

「ふふ、ないしょ」

「た、たくさんはダメだよ？ こわい……こわいから、
だめ……」

「大丈夫よ。私が花音ちゃんの嫌がることとしたことある
かしら？」

ついさっきやっていたじゃないかとツツコミを入れた

くなるが、残念ながらここにツッコミ役はいない。雰囲気
に飲まれてしまった花音は、ほんの少し前のことも忘
れて、『う、うん……』なんて頷いてしまう。

「くすっ」

「あっ！」

そんな花音の様子に満足げに頷いて、絵理衣はもうひと
つタマゴを押し込んだ。

「ほら、簡単に入っちゃう」

「んっ……ああ……入って……くるう……」

「もうひとつ……」

「んにゅっ！ ふうん……っ！」

「もうひとつ」

「あっ！ んにゅっ！」

にゆるん、にゆるんと面白いようにタマゴを呑み込ん
でいく少女のアナル。

そのとても排泄器官に思えない可愛らしくてチャーミ
ングな狭穴は、もつと、もつととおねだりするように、
ひくひくと蠢いていた。

「花音ちゃんのお尻、食いしんばさん」

「ち……違うよう……せんせーが……入れるから……」

「あら、花音ちゃんは私のせいにするの？」

「だ、だって……！ 本当にせんせーが——んにゅ
うっっ！」

そんな可憐な器官に一度にふたつのタマゴを沈め込
む。

「そんな悪い花音ちゃんには……オ・シ・オ・キ♪」

「あっ！ んやあっっ！ 待って！ いううっ！ せん

せ、待って！」

「待ってって言ってもダメー♪」

その聞き分けの良いアナルに、絵理衣はにゅぷつ、にゅ
ぷつ、にゅぷんつと、立て続けにタマゴを沈め込ませ
ていった。

「んふ……いっぱい食べてねー♪」

「んっ……あ……っ……あ……だめっ……お腹……

んっ……も……いっぱい……あ……っ……いっぱい……

だから……っ……！」

「遠慮しなくていいのよ、花音ちゃん。いっぱい、いっ
ぱいご馳走してあげるから」

「あ……っ……んっ……んにゅっ……あ……だ……め
めっ……」

もう、一体いくつタマゴを呑み込ませただろう。少な
くとも花音は、その数を把握できていない。

そして、たくさん、たくさん詰め込まれているうち
に、お腹の中の圧迫感が増し、ゾクゾクと背筋が震え、
はあっ、はあっ、と吐息は乱れ、額から、首すじから汗
がっううつと伝っていった。

「はあ……あ……待って……んっ……せんせ……あ
……ま……っ……」

まくらをぎゅつと握りしめ、苦しげに呻く花音。
「へ……ん……へん……だよ……？ わたし……あ
……っ……」

……お腹の中……あ……っ……脹らんでみたいで……」

同時に、ぞくぞくとした感覚も隠せず、瞳はとろんと
してしまふ。

「変じゃないわよ。だって、このタマゴ、水分を吸収し

て脹らむタマゴだから」

「え……？」

言っでなかったかしら？ みたいな口ぶりで言われた
けれど、もちろん花音は聞いていない。花音が聞いたの
は、ちっちゃくて、やわらかくて、苦しくないというこ
とだけだ。

「そんな——あっっ！」

抗議しようと思ったときには、もう、遅かった。

「あっ！ ああっっ！ やっ……！ あ……っ……！ ふ
くら……む……っ……！ あうっ……！ お尻の中……！
中からっ！ あっ！ んんっっ！」

狭い腸内を押し拡げるように、ゆっくり、ゆっくりと
水分を吸収し、大きくなっていくタマゴ。

ポコッ ポコッ ミチミチッ

「だめっ……あ……っ……！ だめっ……んん……！
こんなの……っ……！ あ……っ……」

気がつけば花音のお腹はまた、ぽこんと大きく脹らん
でしまっていた。

ぎゅるるる めくるぎゅぎゅぎゅ

またしても子犬の様な鳴き声を上げながら、花音の腸
内はひくんつ、ひくんつと蠕蠕し、異物を排泄しようと
蠢く。

「あ……だめ……ん……だめ……で……あ

あ……つつ！

むりゅっ むりゅりゅっ

少女の小さなアナルを内側から押し開くようにして、
少しだけ頭を出すタマゴ。

「あ……んっ……こ、これっ……んくっ……ど……どれ
だけ……あう……っ……おおきくなる……んっ……です
かあ……？」

それはほんとうに一部分しか出ていないにもかかわら
ず、元のサイズからは考えられないほどに大きくなつて
いるように思えて、花音は思わずそんな言葉を口走つて
しまった。

「くすっ……知りたい？」

「ひ……っ……」

その笑顔を見て、それが間違いだつたと気づく。

「それじゃあ、教えてあげようかな」

「あ……んっ……やっ……やっぱり……い……」

だが、それはもう手遅れ。絵理衣はにこにこととても
機嫌の良さそうな笑顔を浮かべて、わざとらしく間を
取って。

「じゃーん、こんなにおつきくなっちゃうの！」

「ひっ……！！」

そう言つて彼女が眼前に突きだしてきたものに息を呑
んだ。あまりに巨大すぎるそれに、花音は恐怖で震え上
がつてしまった。

だって、それは——ウズラの卵くらいの大きさだっ

たはずのそれは、前に動画で見たダチョウの卵くらいに
膨れあがつていて——

「む……むりい……」

ふえつと、半べその声が漏れた。

「そんなの……んっ……おなか……あうっ……はれつ
……しちや……」

ぎゅるるるるっ

それを自覚してしまうと、少女の腸内は全力で抵抗を
始める。

くぎゅるぎゅるぎゅるっ

全力で、お腹の中の異物を排除しようと動き始める。

「だーめっ」

「んいっ……！！」

だけど、絵理衣はそれを許さなかった。

「まだ全部入ってないよー」

「あうっ……んぐっ……」

むりゅ、むりゅりゅっ と肛門を内側からこじ開けて出
て来ようとしたタマゴ——元のサイズよりも何倍も大
きくなったもの——の頭を、膨張前の小さなタマゴで
ぐつと押す。

「いう……っ！ あう……っ！ うああんっ！」

ぐりっ、ぐりっ と無理やりねじ込み押し込むように、
もう満員になってしまつて花音の腸内に詰め込んでい

く。

「ふう……っ……ふう……っ……あう……っ
……あうう……っ……」

苦しげに喉が反り返り、荒い吐息が漏れた。

「だ……めっ……あうっ……だめっ……こわ……れ
……あう……っ……ちや……んくううう……」

ぎゅつと嘔みしめた口もとから涎が溢れていった。

「や……っ……やあ……あっ……せん……せ……だ……
めっ……だめっ……あっ……あああ……」

ギョツと閉じた目元からは涙が零れ、可愛らしい鼻か
らは鼻水までが垂れていった。

「んー……もつと奥に入れないと駄目ねえ」

ひとしきりタマゴを詰め込んで、少女のアナルから飛
び出そうとするタマゴの頭を押さえたまま、ふむ……な
んて考えを巡らせる。

「そうだ……♪」

そして何か思い付いたのだろう——きつと碌でもな
いことだ——視線は花音に向けたまま、空いている左
手だけを背後に手を伸ばして、二度、三度と空振りして
からお目当ての鞆を捕まえて——

「じゃーん♪」

「ひいっ！」

取り出したのはゴム製の、花音の肘から先ほどの長さ
のある器具。いわゆるアナルプラグというものだった。

「や……やだっ……やあ……っ……！！」

それをどうしようとしているのか瞬時に理解して、花
音は悲鳴をあげた。

「ふふ、大丈夫。ちょっと長いけど、細いから。花音ちゃんのお尻の穴なら、問題なく入っちゃやうわよ」

「むりっ……むりい……っ……」

ふるっ、ふるつと首を振りながら、口もとをわななかなせる。

「だめよー、試してみる前から諦めちゃうなんて。そんなの花音ちゃんらしくないな」

だが、そんなことで止めてくれる絵理衣衣ではない。それは花音にだってわかってしまう。

そして、絵理衣は今にもぼんっ飛び出しそうなタマゴの頭をアナルプラグでぐっつと押さえると、『すう』ってひとつ息を吸って――

ぐぼっ ぐぼぼぼぼぼっ

「あつ！ んあうっつ！ うぐうううううっつ！」

少女の身体が出てはいけない音を立てて、一気にプラグが少女の直腸に呑み込まれてしまった。

「ひっ……！ う……っつ！ ひぐっ……！ むりっ……！ あつ……ほんと……んっ！ む……りっ……」

びくん、びくん、びくんとベッドの上で跳ねる花音の肢体。

「まだよ、まだ。タマゴは奥の奥までねじ込んでやわないとね」

「む……りっ……むりいっ……もっ……いぎどま……りっ……あつ……」

「えいっ！」

いゅぼっ いゅぼぼぼぼっ

「ひきゅうううんっつ！」

お腹の中に詰め込まれたたくさんのタマゴは、アナルプラグに押され、ぎゅっつと閉じていた花音の直腸の奥の扉を強引にこじ開けた。

一度こじ開けられるとそれをもはや閉じること出来ず、少女の扉――S状結腸をぐぐり抜け、タマゴは更に奥まで押し込まれていった。

あ……

ポコンッ ポコンッ ポコポコンッ

瞬間、花音のお腹は歪に膨らみ、その衝撃に彼女は声にならない悲鳴を上げた。

可愛らしい鼻からは勢いよく鼻血が噴き出し、柔らかなような頬をつうううつと伝っていった。

「ふふ……プラグもS状結腸を抜けたわね。それじゃあ……」

だけど、絵理衣はそれで満足はしない。するわけがない。あたりまえの様にプラグから伸びているゴムボールを掴み、ぎゅっつと握りしめて――

い……

刹那、花音はもう一度、声にならない悲鳴を上げた。

それは、さっきの悲鳴よりもお強い、苦痛とか快楽を飛び越えた『衝撃』を現す声だった。

「ほーら、お腹の中でおつきくなつていくねー」

くすくすくすつと笑いに笑いつつ、しゅこ、しゅこ、しゅこつとゴムボールをぐづばぐづばとし、少女の結腸の向こうにあるバルーンに空気を送り込んでいく。

「ひっ……！ あつ……あ、あ、あ、あつ！ うあつ！ あ、あ、あ、あ、んあつっ！」

ポコンッ ポコンッ ポコポコンッ ポコンッ

凄まじい音を立てて服らんでいく花音のお腹。

ぎちっ ぎちちちっ ぎちちちちちちっ

そのまま弾け飛んでしまいそうな音を立てて、少女の薄いお腹を妊婦の様に脹らませていく。

「ひっ……ひはっ……ひは……っつ！」

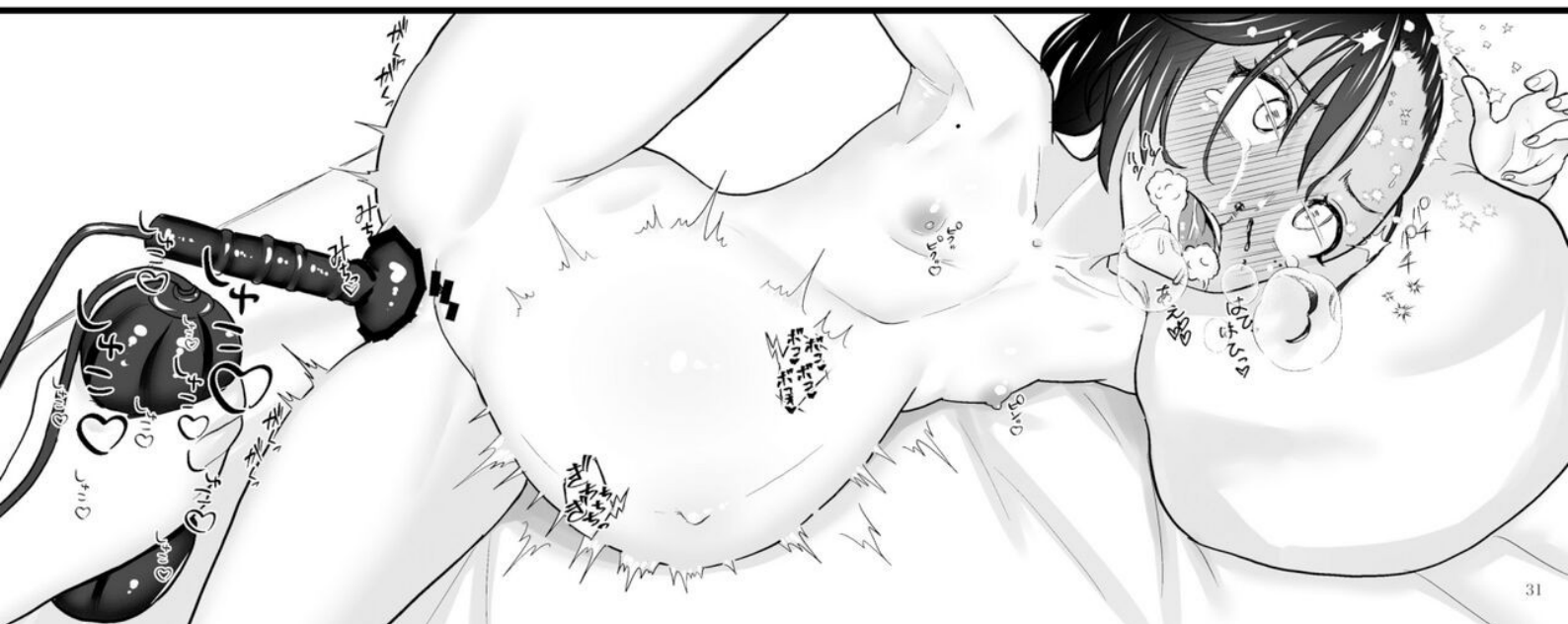
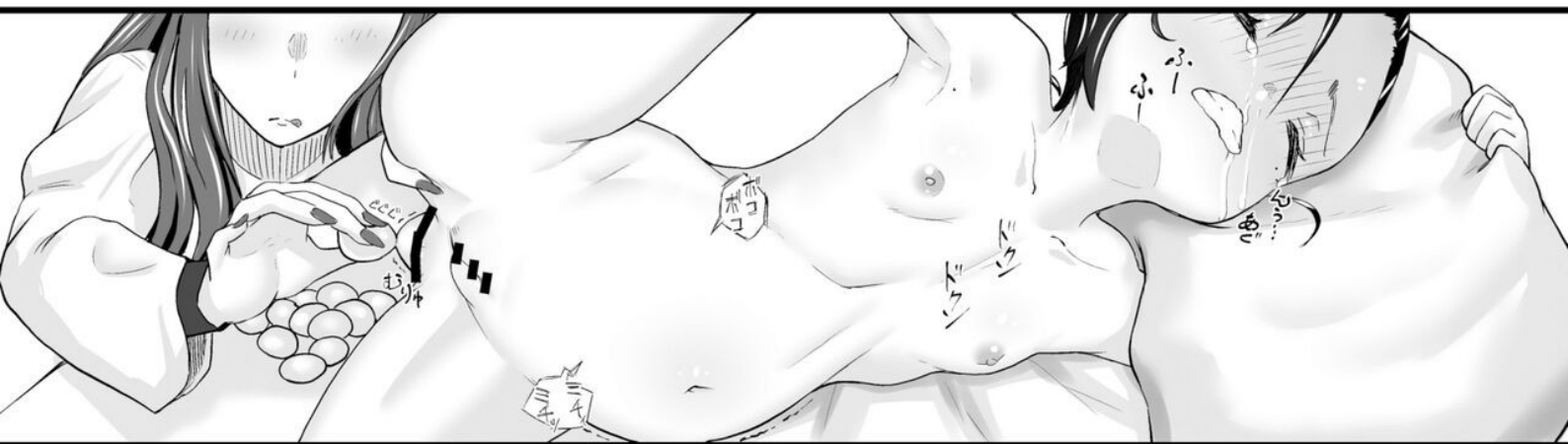
少女の可愛らしい口もとから息も絶え絶えの吐息と、それから泡だった唾液が零れる。

「うっ……あつ……ああつ……あああうっ……あうっ！」

パチパチ、パチパチと頭の中で何かが何度も何度も弾け、顔が真っ赤に染まり、大きくてキュートな腫が、限界にまで見開かれる。

ぎゅ……ぎゅ……ぎゅ……

異物を排泄しようと腸内は収縮し、凄まじい音を立て



ていたけれど、S 状結腸をくぐり抜け、その締め付けの向こう側で脹らむバルーンは、少女の身体の防衛本能を完全に阻止していた。

……そう……なのに……)

ゆっくりと屈み込みながら、少女のアナルから突き出たアナルプラグの管に手を伸ばし、一気に引き抜いた。

「~~~~~」

ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ

瞬間、S状結腸を、そして肛門をめくり返し裏返す勢いで、脹らんだままのバルーンが勢いよく飛び出す。

ぐぼっ ぐぼっ ミチミチミチ ぶぼっ

その勢いに誘われるようにして、信じられない大きさにまで脹らんだタマゴがぼとんつ、ぼとんつとふたつ飛び出て床の上で跳ねた。

「あは♪ 上手に産めた♪」

絵理衣は、勢いよく少女のお尻から産み出されたタマゴに、弾んだ声をあげる。

だが、そのとんでもない刺激に一発で意識が飛んでしまった花音は、まだお腹はパンパンに脹らんでいるというのに、そのあとタマゴを産み落とす事は出来なかった。

「花音ちゃん？ おーい、花音ちゃん？」

ぺちぺちつとごく軽い強さで頬を叩いてみるけれど返事はない。

「気絶しちゃった？」

少女はただ、びくん、びくんと全身を震わせ、ギシギシギシつと縄を軋ませるばかり。

「うーん、やり過ぎちゃった？」

そんな花音の前にして、絵理衣はあまり反省した様子もなく小さく首を傾げて――

「もう少し産みやすくしてあげた方がいいかしら……？」

まるで見当外れなことを、ぽつりと呟いた。

S

そして――

「あ……れ……？」

花音がはたと気がつくのと、彼女は保健室の床に跪くような姿勢になっていた。

「ふふ、気がついた？ 花音ちゃん」

「せん……せ……？」

気がついた？ 気がついたってなんだろう？

さっきまでのことがすぐには思い出せなくて、ぼんやりとしてみよう。

ええつと……どうしてわたしはここにいるんだっけ……なんてことを考えてしまう。

「ごめんね、さっきの方が産みやすいかなって思ったんだけど、そんなことなかったみたい。でも、これだったらお腹に力入れやすいでしょう？」

「あ……」

ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ

「んくっ……！」

思いだした瞬間、お腹がすごい音を立てた。

ぞくぞくぞくつと身体が震え、それと同時にお尻の穴が内側から押し上げられる感覚。

「んあつ！ うつ！」

ぼとんつと重量感のある音。お腹の中がふつと軽くなるような感覚。

「あは♪ さつそくひとつ産めたね♪」

ぞくぞくぞくつと背中が震え、頭の中を快楽が埋め尽くしていく。

腕と足を縛られ、前傾姿勢でお尻を突き出した状態の花音に、出来ることと言えばタマゴを産むこととぞくぞくと身体を震わせることくらいだった。

「でも、まだたくさんお腹の中に入ってるよね？ 全部産んじやわないと大変だよね」

「はあ……はあ……つ……」

優しい声が、悪魔の声のように聞こえた。

いつもの笑顔が、魔物の嘲笑のように思えた。

「あ……うつ……んくつ……んく……ん……」

ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ ぽっ

お腹が唸る。

「は……つ……ひつ……はひつ……」

それに合わせて凄まじい排泄欲が高まる。

「どう？ 産めそう？ 産めそうなら教えて？」

「あ……んっ……んあ……うめ……ます……あう……タマゴ……んくつ……うみっ……！ ますううつっ！」

ぬぽんっ ぬぽっ ぬぽっ

一気にみつつのタマゴが少女のアナルから産み落とされた。

「~~~~~」

その強烈な刺激、行きすぎた快楽に花音はあつという間に絶頂に導かれてしまう。

「あは♪ す〜いす〜い♪ みつつも一度に産まれたわ♪」

「は……………あつ……………ああつ……………あう……………あううう……………あうううう……………」

「でも、まだまだたくさん残ってるわよね？」

「あ……………う……………あ……………は……………い……………」

怖い。大好きなせんせーの声が、顔が、雰囲気、空気が怖い。

だけど同時にぞくぞくする、身体が芯から震える、お腹の奥がキュンキュンする。

みちみちに詰め込まれたタマゴがお腹の中でうずうずして、早く、早く産んでと少女を急かしていく。

「じゃあ、見せて♪」

「あ……………つつ！ また……………つつ！ うみつ……………ますつつ！」

ぬぽっ ぽんっ ぽんっ

「は……………つつ！ うつつ……………！ うう……………つつ！ あ……………つつ！」

また絶頂してしまった。

「ふふ……………二個♪ あとはあ……………いち、に、さん……………多分、五個？」

それなのにまだ五個も残っているとわかれて、絶望感が心を支配していく。

でも、同時に胸がかあつと熱くなるのを、花音は止める事が出来なかった。

もう許して欲しいと思いつつ、この痺れるような快楽をもつともつと感じたいと思っている自分がいることを理解して、花音は恐ろしくなってしまう。

「ふふ……………じゃあ、産んじゃおう♪ 残りも……………ね？」

「は……………い……………」

ごくんと唾を飲み込む。その音が想像以上に響いて驚いてしまう。

「ほら、お腹力入れて、んーっていきんで、がんばれ♪ がんばれ♪」

「んっ……………んーっ、んうー……………」

奥の奥、S状結腸をぐぐり抜け下行結腸にまで到達しているタマゴは、いきんでみてもなかなか降りてこない。

「んうっ……………んううっ……………んくっ……………くううんっ……………んくううううっ……………」

それでもなお、花音はぐつと息を詰めて、ぎゅううつと目を閉じて、奥歯を噛みしめながらお腹に力を入れて――

「んひつつ！」

利那、凄まじい快楽が背筋を走り抜けた。それはタマゴがS状結腸を通り抜ける感覚だったが、そんなことは彼女に理解出来るわけもなかった。

ただ、その代わり、彼女が自覚できたのは――

「~~~~~」

そのままの勢いで肛門を押し開けて産み落とされるタマゴ

の感覚。

ぶぽっ ぶぽっ ぽんっ ぽんっ ぽんっ ぽんっ

その刺激に、頭の中で光が弾けた。神経が焼き切れてしまいうんじやないかって思ってしまうほどの、とんでもない快楽だった。

「あ……………ひ……………ひあ……………んっ……………んう……………ああああ」

「わあ、四つ出たね。それじゃあ、あとは一個……………」

頭がくらくらしていた。光はずつと頭の中で弾けつばなしで、もう、今すぐにでも崩れ落ちてしまいたいそうだった。

「す〜いね、花音ちゃんも本当に頑張り屋さんだね。先生、花音ちゃんが全部のタマゴを産めるとは考えてなかったわほんと、す〜い」

だけど、その笑顔を向けられると、出来ない。意識を手放すなんて出来ない。

せんせーが褒めてくれた、せんせーがす〜いって言ってくれた。

「だったら。だったら――」

「んっ……………」

お腹に力を入れる。

「んくっ……………」

お尻の穴に意識を集中する。

「ふっ……………んっ……………くうんっ……………む」

ひくっ、ひくっとお尻の穴が震えている。いっぱい、いっぱい腸液を垂らしながらいやらしくくぱくぱと開いたり閉じたりしている。アソコからいっぱいえつちなオツユが溢れ

て、床を、産み落としたタマゴをねつとりと濡らしていて。

「あ……うつ……でない……よお……」

「だけど、あとひとつ入っているはずのタマゴは、どうやって出て来なかった。」

「んくっ……くんっ……でてこないよお……」

身体を折り曲げてお尻を突き出して、限界まで息を詰めてみても、奥の奥に入っているタマゴはびくりともしないまま、花音に重量感を与えていた。

「ふえ……ふえええ……」

泣いてしまった。

「あうっ……ぐすっ……産めないよお……」

辛いのか、悲しいのか、気持ち良すぎるのか、何が何だかわからなかったけど、とにかく花音は湧き出てくる鳴咽を、涙を抑えることが出来なかった。

「くすっ……どうして泣くの？」

そんな花音にそつと歩み寄り、後ろから包みこむように抱きつく絵理衣。

随分と小さくなったものの、まだぽこりと脹らんだお腹を優しく、優しくなで、なで、なでと撫で回して。

「だって……あうっ……だって……でない……ぐすっ……タマゴ……あうっ……産めない……」

「泣かないで。花音ちゃんが泣いてたら、先生まで悲しくなっちゃう」

そう言いつつも、絵理衣の顔に浮かんでいるのは笑顔だった。

「先生が手伝ってあげるから。ね……？」

優しく、優しく語りかけながら、その口もとは吊り上がり、

楽しくて楽しくてたまらないといった様子だった。

「ぐすっ……せんせえ……」

「それじゃあ、ベッドに行きましようか」

そのまま小さな花音の身体を抱き上げ、そつとベッドに下ろす。

「あ……あの……せんせ……？」

「どうしたの？ 花音ちゃん」

「えつと……その……縄、解いて……」

縛られたまま、高々とお尻を突き出した姿勢でうつ伏せにされた花音は、不安げに問いかける。

「ふふ、ごめんね。もうちょっと我慢してね。この姿勢の方がやりやすいから」

「え……？」

「だけど、絵理衣はそんな花音にくすつと笑いかけ、そして——」

ゴッ

「うあつっ！」

その瞬間、花音はお尻の穴を何か硬いモノで無理やりに押し上げられた。

「んぎゅっ……！」

そして、首に何かを引っかけられ、後ろに強く引かれる感覚。

「あつ……はっ……！」

その強い力に一瞬呼吸が苦しくなり、ぱくぱくと大きく口を開閉した。

「苦しい？ 多分、調整したから大丈夫だと思うんだけど」

「は……あつ……ああ……んあつ……せんせ……なに……？ これ……？」

「うん、大丈夫そうね。でも、あんまり暴れちゃダメよ。気管が締まっちゃうかも知れないし、お尻がめくれ上がっちゃうかも知れないから」

「きか……え……？ おし……？」

自分の身体に何が起こっているのか分からなくて、パニック寸前で身を固くする花音。

「くすっ……大丈夫、暴れなかつたら大丈夫だからね。花音ちゃんのお尻の穴を上の方に押し上げて、首のところで固定しているだけだから」

「え……？ え……？」

「わからない。何を言っているのかわからない。だけど、だけとせんせーは暴れちゃダメって言っていて——」

「は……あ……ああ……ああ……」

「ふふ、いい子」

褒められて、少し嬉しかった。

「だから花音ちゃんのこと大好き」

好きって言われて、胸が温かくなった。

「もうちょっと我慢してね、今、二股のアナルフックで花音ちゃんのお尻の穴を引っ張り上げてるから」

「いっ！ うんっっ！」

「だけど、更にお尻の穴を硬いモノで押し上げられて、反射的に身を固くしてしまう。」

「はい、大丈夫だからねー。今、花音ちゃんのお尻の穴をアナルフックと肛門鏡で押し上げてただけだから。全然怖い

事なんてないのよ」

「や……やあ……」

散々弄くりまわされ詰め込まれ、引つ張り出されたお尻の中だったけど、直に覗かれていると、やはり羞恥の感情が湧いた。

「み、みないで……」

「でも、見ないと最後のタマゴ、どこにあるかわからないから」
「う……あ……あう……」

そう言われるともう、大人しくするしかない。恥ずかしくて顔から火が出て死んでしまいうだったけど、そんなことを考えたところで身動きもまともに取れないこの状況では、花音にはどうすることも出来なかった。

「んー、綺麗……花音ちゃん直腸、本当に綺麗ねえ」

うつとりとした様な絵理衣の声。

「ピンク色でひくん、ひくんつてしてて、ねっとり濡れててえつちなあ……すぐえつち。いつまでも見ていたい気分」

「あ……あの……せんせ……んくつ……タマゴ……どう……ですか……？」

「ああ、ごめんなさい。あんまり綺麗だから見惚れちゃった」

「あんまり……見ないで……」

「でも、見ないとタマゴ、産ませてあげられないから」

「ううっ……む」

恥ずかしい。恥ずかしい。本当に、泣きたい程に恥ずかしい。大好きなせんせーにお尻の穴を思いつき掘げられて、中をまじまじと観察されて、花音は本当に、このまま消えてしまいたいと思っただけ——同時に、ゾクゾクと背中が震え、頭の中がじんと痺れてしまうような感覚があった。

「んー、どこかなあ」

「あつ……！ んっ……！」

「おく……かなあ……」

「ひっ……んひっ……！」

その状態で、器具で更にお尻の穴を押し掘げられる。ぐいつ、ぐいつと縁を引っぱられたかと思ったら、ぐりんつ、ぐりんつと動かされて、びくんつ、びくんつと身体が震えてしまう。

「あー、S状結腸の奥……下行結腸の辺りにひっかかっちゃってるのね」

しばらくの間その羞恥に耐えていると、なるほど、とかいいながら絵理衣が呟いた。

「うーん、これは手をつ突っ込んだ方が早いかも……」

「え……？」

そして次の瞬間聞こえた声に、花音は頭がフリーズしてしまった。

手を……突っ込む……？ どこに……？

「せ、せんせ……あの……」

「うん……肛門に……弛緩剤を打って……」

「せ、せんせえ！ せんせえ！ な、なにするんですか……っつ！」

「大丈夫よ」

花音の疑問に絵理衣ははつきりとは答えずに、ただ一言そう言った。

「何も怖い事なんてないからね」

「えっ、で、でもっ、でもっ……」

聞こえる言葉の全てが不穏で、不安で、怖い。

怖くてたまらない。

「とりあえず注射打つね。ちよつと痛いかも知れないけど我慢してね」

「ちゅ、注射！？」

どこに？ どこに……？ 待って……待って……！

「暴れちゃだめよー」

ぐつとお尻を押さえつけられた。

「手元狂っちゃったら危ないからね」

「ひ……」

あ、危ない！ やっぱ危ないって！ 怖い！ 怖い怖い！！

「それじゃあ、打つわね……ちよつとちくつてするよー」

「んっ……くっ……うううっ……」

つぶんと針の刺さる感覚。お尻の穴の縁にずぶつと沈み込んでくる鋭いなか。

「いっ……うっ……あつ……い……た……っ……！」

そして、ずきんつと疼く様な痛み。

「……」

「あつ！」

次に花音に襲いかかったのは、痛みとは違うもの。

「あつ！ ああつ！ あつっ！ おしり……っ！ あうっ……っ！ うら……っ！ がえ……っつ！」

身体が内側から開いていく。お尻の穴の感覚が無くなって、どこまでも、どこまでも開いていく。

「いや……あ……っ！ いやっ……やあ……っ……やだあ……」

「うふ……可愛いなあ。ひとりでに開いていっちゃう花音ちゃ

「ひうつつ！」

82
 11
 10
 82
 11
 10
 7
 82
 11
 10
 11
 10
 7

やっぱり怖くて――

「ふふ……到着」

とんととお腹の中の行き止まりに、絵理衣の指先が到達したのを感じた。

「やっぱり花音ちゃん、ちっちゃいなあ。ここまで突っ込んでも、私の肘までは入らないんだ」

「ひ……？ ひじ……っ！？」

な、なに？ なになになになになら！？

ひじっ……！？ ひじが入る？ 入るって……？

「わかる？ ねえ、わかる？ 花音ちゃん、わかる？」

「わっ……かな……で……すう……っ！」

わかるはずがない。

「わかつ……！ な……でっ……すう……っ！」

だって、だって、こんな感覚今まで味わったことがない。

「ここはねー、花音ちゃんのS状結腸♪ ここをこうやってぐりぐりして……」

「ひっ！ いっ！ ひいひいっ！」

「ひろげたりい……ぐるぐるってしたりい……」

「あっ！ あっっ！ あっっっ！ ああああっっ！」

絵理衣の指が、少女のS状結腸をぐりぐりと抉った。

そのまま円運動をしつつ指を二本沈めていって、ぐばあつと押し拡げていった。

「~~~~~」

本来指など入れる訳がない場所に、指が押し入る。

そしてぐりぐりつと蠢いて、更に太い部分……手首の部分が貫通する。

「~~~~~」

「うんっ……うんっ……ないわねえ……下行結腸にはない

感じ……だとすると……」

「りゅっ りゅりゅりゅりゅ

息が出来なかった。

「ぶっ ぶっ ぶっ ぶっ ぶっ

上手く空気を吸い込むことが出来なくて、口をわなわたと震わせて、舌が突き出てしまった。

「横行結腸……んっ……あ、これね」

ぎゅつと、お腹の中で握りこぶしが作られる。

「ひっ……ぎゅつ……」

そのまま、ぐりぐりつと壁を擦られる。

「うーん、ぐーのままじゃS状結腸、通れないかな？ でも、そうしたらまたおくにいつちやうかも知れないし……」

「あがつっ！」

ぐーをぐいつと引かれると、引つかかる感覚があった。

「だ……めっ……だめっ……あっ……が……んっ……ぎい……っ！」

それでもぐいぐいと、絵理衣は引き出す動作を止めなかった。

「い……あ……っ！ あうっ……！ うあうっ！ だめっ……！ だめっ……！ こわ……れる……っ！ おな……か……っ……こわ……っ……れ……っ！」

「えいっ♪」

ぞくっ ぞくぞくっ

がくっ がくがくがくっ

「ぶおおっ らりゅうらうんっ

そして、力の限りひっぱる。

すると――

「~~~~~」

「ぽんっ

勢いよく、ぐーをにぎったままの絵理衣の拳が少女の肛門から飛び出し、その勢いで握っていたタマゴが宙を舞い、にゅちゅつと湿った音を立てて壁にぶつかった。

「ばーやあああああ

そして、それと同時に花音は勢いよくおしっこを噴き出し、全身を反り返らせて激しく痙攣して――

「~~~~~」

「あら……大変、直腸が飛び出しちゃった」

花音の可憐な穴から飛び出した生々しい内臓色の器官。

それは可愛らしい小さな穴をひくひくと震わせながら、びくつびくつと蠢く。

「そんなに先生の拳が気に入っちゃった？ 可愛いなあ」

そして、絵理衣は花音の腸液まみれになった自分の腕をペろりと舐めて。

「もっと遊んであげたいけど、さすがの花音ちゃんもダウン

「しちゃったみたいだし……今日はこれでお開きかしら」

「そういつつアナルフックの先端に軟膏のようなものを塗りつけ、飛び出した直腸の先端、結腸口に挿入して、一緒にゆるりと押し込んで。」

「あはっ、花音ちゃん、お尻、大好きになっちゃったかも♪」

「一瞬びっくりと跳ねた花音の様子を満足げに見つめ、くすりと微笑むと、なで、なでつと優しく、愛おしく頭を撫でてやるのだった。」

終

チャームポイントは
カワイイ笑顔と
左目の下の特徴的な二重泣きぼくろ。

くらはし かのん 倉橋 花音

2月28日生まれ 1X歳

身長132cm / 体重 29kg

私立陽葵ヶ丘女子学園〇等部1年生

私立の名門お嬢様学校に通っているけれど、本人はいたって庶民。
クラスで(というのが学校で)一番のちびっこ。

しなやかな筋肉の持ち主で、運動神経はかなりいい。

勉強も決して要領のいいタイプではないが、

地頭がよく頑張り屋さんなのでそこそこ上位。

明るく朗らか、心優しい女の子。
いつもにこにこを心がけている。

本人は気づいていないが、
周囲の男女問わず魅了してしまう
不思議なオーラが出ている。

バスケ部所属。

体格ではもの凄く不利だけど、

持ち前のスピードとジャンプ力で

1年生ながらチームのエース。

保健室の先生♀とヒミツのお付き合いをしている。



「花音ちゃんとお尻遊び」

発行日 二〇二三年五月五日
発行 不可思議
印刷 大陽出版株式会社

文 玉沢円
イラスト 双木こじろ
デザイン 双木こじろ
編集 玉沢円

fukashigi@mac.com (e-mail)
@tamasawatubura (Twitter)

Fantia

pixivFANBOX







花音ちゃんとお尻遊び

花音ちゃんとお尻遊び

不可思議

不可思議
FUKUSHI

DOJIN
R18
成人向け